

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis

日本語の能格構文に関する一考察
—「ガ格」の扱い方をめぐって—

Ergative Constructions in Japanese:
On the Properties of Case Marker ‘GA’

麻子軒

Tzu-Hsuan Ma

指導教授：林慧君 博士

Advisor: Hui-Jun Lin, Ph.D

中華民國 99 年 7 月

July, 2010

國立臺灣大學碩士學位論文
口試委員會審定書

日本語の能格構文に関する一考察
—「ガ格」の扱い方をめぐって—

本論文係麻子軒君 (R96127005) 在國立臺灣大學日本語文學系、
所完成之碩士學位論文，於民國 99 年 7 月 26 日承下列考試委員審查通
過及口試及格，特此證明

口試委員：

林 惠君

(簽名)

(指導教授)

林文賢

黃鴻信

系主任、所長

文學院日文系
系主任徐興慶

7/29

(簽名)

誌謝

能夠完成本篇論文，首先要感謝我的指導教授，林慧君老師細心且親切的指導。老師總是在我迷失於論點之茫茫大海時適時點醒我，且提示我十分具體有用之建議，同時也在平時與我討論生活上的大小事，使我獲益良多。另外更要感謝審查我的論文之兩位口試委員，林文賢老師自大學時代即不斷教導我正確看待日語研究的觀點，並於撰寫本篇論文時提供了我更宏觀的視野，告誡我理論面上今後需留意的點；黃鴻信老師除了讓我於研究所在學期間學習到做學問該有的嚴謹態度，也透過實際操作使我體會到什麼是真正的研究及論文寫作。沒有以上三位老師的教誨及嚴格把關，這篇論文不可能誕生，在此一併表達我誠摯的謝意。

接著，我要感謝我的家人給我的守護。外公以及外婆一直給予我無比的關心以及支持，並讓我在經濟上沒有後顧之憂，能夠全心全意將注意力放在論文上。母親平時則注意我的生活起居，並在不給予我多餘壓力的情況下，讓我在最舒適的環境下撰寫論文。這篇論文能夠完成，您們功不可沒。

另外，也要感謝同於林慧君老師門下，並常給予我在論文方面十分有益之意見的周郁涵同學、陳俊宏同學。同時，大學時代的同窗好友，李佳穎同學、許佳璇同學也在平時以各種形式協助了我許多。當然，更要特別感謝張君如同學細心地協助我修改英文摘要。除此之外，研究所的行政人員、學長姊、學弟妹、以及我可愛的學生們，也在各方面給予了我許多的支持。其他仍有太多幫助過我的人，在此謹以：「謝謝你們！我做到了！」一句話來表達我內心對大家的感激。

麻子軒 謹誌於台灣大學

中華民國九十九年八月十六日

摘要

在語言類型論中，日語一般被歸類為對格語言，但如同「夏子はメロンが好きだ」一文所示，在日語中亦可窺見能格語言的性質。因此，若以對格語言之觀點分析上述例句中之「ガ格」，在研究上將會產生侷限性。本研究將能格語言之觀點導入日語，並重新定位「ガ格」在語法上之機能。透過設定能格構文之基本形，我們成功將目前被分為「主語（格）」「對象語（格）」兩種機能的「ガ格」統合成單一「主格」的概念。另外亦運用「非對格性假說」及「語彙概念構造」之理論，將存在於能格性文法現象之構文層次及意義層次互相結合。最後，本研究透過比較能格構文與對格構文之差異，找出了日語中能格構文之本質。

本研究之結論為以下三點：(i) 日語中存在能格構文。其產生過程為：首先存在著帶有某性質的物體，接著人們認知其物體後，於內心產生情緒反應。也就是說，由客觀轉為主觀的變化過程，即為能格構文之發生條件。(ii) 透過 LCS，能夠將能格構文（構文層次）及能格性述語（意義層次）互相結合。由其結論可得知，能格性述語會由於「主觀性強度」之不同，將其構文結構反映在「外項」「內項」之具現方式上。根據其具現方式之不同，本研究將能格性述語分為三類。(iii) 相對於能格構文為帶有主觀性之構文，對格構文則是帶有客觀性之構文。而在日語中，能格構文之本質，即在於客觀轉主觀時伴隨之「主觀性使役化」現象。其本質主要反映在「視點」以及「格配置」等等的日語句法現象上。

關鍵詞：ガ格、主格、能格構文、非對格性假說、LCS、主觀性、使役化

Abstract

Although Japanese is generally classified as an accusative language in linguistic typology, sentences with an ergative construction, such as “Natsuko-wa Meron-ga SUKIDA”, are also very commonly seen. Therefore, if we analyze the sentence above from the perspective of accusative language, it will be very difficult to define the case marker ‘GA’. In the thesis, I will review Japanese sentence construction from the viewpoint of ergative language, and thereby redefine the case marker ‘GA’. Through the ergative construction, the two functions of ‘GA’ can be unified into one, which is nominative case. Besides, by referring to the theory of “Unaccusative Hypothesis” and “Lexical Conceptual Structure”, I discuss the ergative constructions in Japanese from both the syntax level and meaning level. Finally, by comparing ergative construction with accusative construction, I will bring out the essence of the ergative construction in Japanese.

My conclusions are as follows: (i) The theory of Ergative constructions in Japanese is tenable. The following is how it takes place: First, there is something with certain qualities. Then people recognize it and hence the emotional response. In other words, that objectivity turns into subjectivity is the necessary element in the occurrence of the ergative construction in Japanese. (ii) Through the theory of LCS, the ergative construction (syntax level) and the ergative predicates (meaning level) can be combined together. Therefore, it is proved that the rule of the appearance in “external argument” and “internal argument” will change and will be reflected in the syntax,

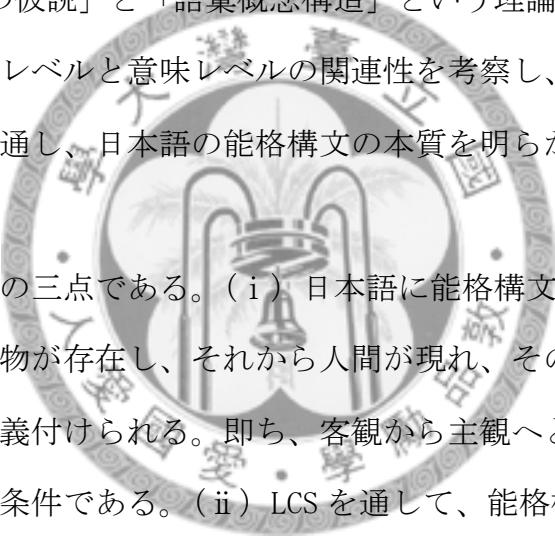
according to the degree of subjectivity in ergative predicates. Owing to the difference in the appearance, I divided the ergative predicates into three groups. (iii) Whereas ergative construction is with subjectivity, accusative construction is with objectivity. Thus, the essence of the ergative lies in the process, which happens incidentally while the causativization of subjectivity is taking place. This is conspicuous in Japanese syntactic phenomenon such as “point of view” and “case arrangement”.

Keywords: case marker ‘GA’, nominative case, ergative construction, Unaccusative Hypothesis, LCS, subjectivity, causativization



要旨

言語類型論では、日本語は一般的に対格言語とされているが、例えば「夏子はメロンが好きだ」という構文には、能格言語の性質が見られる故、従来上記の文における「ガ格」を対格言語の観点で分析するには限界があるようと思われる。本稿では、能格言語の観点を日本語に取り入れ、「ガ格」の機能を再検討した。その結果、能格構文の基本形を設定することで、今までの「主語（格）」と「対象語（格）」という二通りで扱われた「ガ格」を「主格」にまとめられた。その上、「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」という理論を利用し、能格的文法現象における統語レベルと意味レベルの関連性を考察し、最後に、能格構文と対格構文の比較を通して、日本語の能格構文の本質を明らかにする。



本稿の結論は以下の三点である。（i）日本語に能格構文が存在する。その発生過程は、まずある物が存在し、それから人間が現れ、その物を認知してから感情を発した、と定義付けられる。即ち、客観から主観へと変化するプロセスが、能格構文の発生条件である。（ii）LCSを通して、能格構文（統語レベル）と能格性述語（意味レベル）をリンクさせることができる。その結果、能格性述語は「主観性の度合い」によって、「外項」「内項」の現れ方が変わり、統語構造に反映されることが分かった。その現れ方をもとに、能格性述語を三つのグループに分類できる。（iii）能格構文は主観性をもつ構文であるのに対し、対格構文は客観性をもつ構文である。そして、能格構文の本質は、主観性による使役化にある。この本質は「視点」「格配置」などの統語現象に反映されている。

キーワード：ガ格、主格、能格構文、非対格性の仮説、LCS、主観性、使役化

目 次

口試委員審定書	i
誌謝	ii
中文摘要	iii
英文摘要	iv
日文摘要	vi
目次	vii
図目次	x
表目次	xi
第1章 序論	1
1-1 研究動機と目的	1
1-2 研究対象と方法	2
1-3 本論文の構成	3
第2章 先行研究	5
2-1 「ガ格」研究概観	5
2-2 時枝説とその問題点	5
2-3 能格言語とは	8
2-4 本稿の立場	11
2-5 用語の規定	13
第3章 能格構文における「ガ格」について	15

3-1	日本語に見られる能格性	15
3-2	「能格」の本質	18
3-3	能格構文における「行為・過程の出発点」	22
3-4	日本語における「能格」と「主格」の位置付け	27
3-5	二重「ガ格」について	31
3-6	まとめ	33

第4章 能格性述語の意味による分類 37

4-1	理論の枠組み	37
4-1-1	非対格性の仮説	39
4-1-2	語彙概念構造 (LCS)	43
4-2	能格性述語の LCS による分類	46
4-2-1	客観的用法 (非対格述語)	47
4-2-2	外項の追加による使役化 (非対格・使役化的述語)	50
4-2-3	主観的用法 (使役化的述語)	54
4-2-4	内項の背景化 (非能格述語)	58
4-3	まとめ	62

第5章 日本語における能格構文の位置付け 67

5-1	日本語における能格構文と対格構文	67
5-1-1	主観性をもつ能格構文	69
5-1-2	能格構文における擬似一人称	74
5-1-3	客観性をもつ対格構文	76
5-1-4	能格構文と対格構文の違い	79
5-2	日本語における能格構文の本質	81

5-3 これまでの文法理論についての検討	82
5-4 まとめ	83
第6章 結論	85
6-1 本論文のまとめ	85
6-2 今後の課題	87
参考文献	89
付録 能格性述語 LCS 一覧	93



図目次

図 2-1 対格言語と能格言語の格分布	8
図 2-2 対格言語と能格言語の格体系	8
図 2-3 対格言語と能格言語のイメージ図	9
図 2-4 連続体としての「主格」と「対象格」	11
図 3-1 日本語における能格構文のイメージ図	16
図 3-2 シルバースティーンの名詞句階層	19
図 3-3 認知ルートのイメージ図（高い）	23
図 3-4 認知ルートのイメージ図（こわい）	25
図 3-5 認知ルートのイメージ図（こわい）	26
図 3-6 能格構文の基本形と統語構造	35
図 4-1 自他動詞における枝分かれ構造	41
図 4-2 結果述語による修飾構造	42
図 4-3 使役構造の雛形	45
図 4-4 主觀性の度合いによる能格性述語の分類	57
図 4-5 非能格述語と非対格述語の構造比較	61
図 5-1 能格構文の基本形と統語構造	67
図 5-2 対格構文の基本形と統語構造	68
図 5-3 能格構文の視点図	70
図 5-4 対格構文の視点図	77
図 5-5 能格構文と対格構文の視点比較図	79

表目次

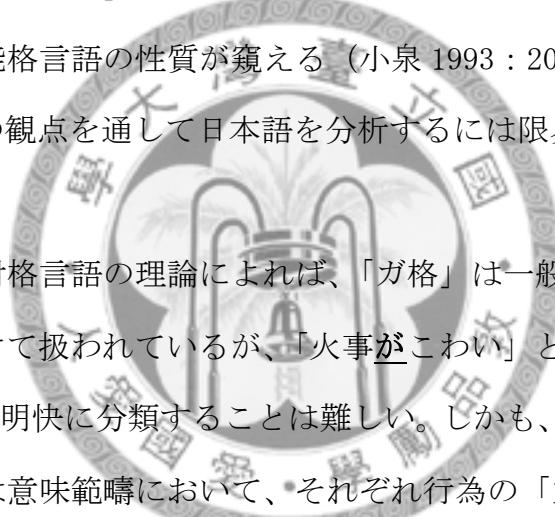
表 2-1 用語規定の例示	13
表 3-1 日本語における能格構文を成す述語	18
表 3-2 自然な構文の流れ	19
表 3-3 名詞句階層に従う構文	20
表 3-4 名詞句階層に違反する構文	20
表 4-1 表層構造と深層構造の用語対応	43
表 4-2 能格構文の基本形と LCS の対応関係	62
表 4-3 能格性述語の LCS による分類	63
表 4-4 能格性述語の整理	64



第1章 序論

1-1 研究動機と目的

言語類型論では、日本語は一般的に対格言語と言われているが、「山が高い」 「刺身が好きだ」といった表現の「ガ格」も、西洋文法が中心になった対格言語の理論に基づき、それぞれ「主格」と「対象格」と論じられたものが多い¹。ところが、「夏子はメロンが好きだ」のような一部の構文においては、述語「好きだ」の前に来る「メロン」という名詞句は、従来の「主格」と同じ標識からして、日本語にも能格言語の性質が窺える（小泉 1993：208）。したがって、従来通り、対格言語の観点を通して日本語を分析するには限界があると言えよう。



例えば、上述の対格言語の理論によれば、「ガ格」は一般的に「主格」「対象格」の二通りに分けて扱われているが、「火事がこわい」という文の「ガ格」はどちらに属するか、明快に分類することは難しい。しかも、「主格」と「対象格」が標識する名詞句は意味範疇において、それぞれ行為の「主体」と「客体」に当たることが多いので、いわゆる正反対の概念である。このような全く正反対の概念は、なぜ同じ格標識で示されるのかも大変興味深い。これらの疑問は、対格言語の文法理論では解釈しにくい。

以上を踏まえて、本稿の目的は、能格言語という視点を取り入れ、「私は火事がこわい」のような「ガ格」をめぐる能格的文法現象を考察し、改めて日本語の「ガ格」の機能を突き詰めたい。また、統語レベルと関連し、日本語における

¹ 代表的な学者に、時枝（1950）がいる。当時、氏が用いた用語は「主語（格）」「対象語（格）」であったが、それらの用語は文法レベルの「主語」「対象語」と混同しやすいので、本稿ではそれらを格レベルのものとして明確に示すように、「主格」「対象格」と表記することにした。

る能格性述語の意味分類も検討する。最後に、対格言語の特徴と比較することによって、日本語の能格的文法現象が生じた具体的な理由を明らかにし、なぜ日本語において「主格」と「対象格」が同じ「ガ格」標識で示されるかという疑問の答えを求める。

1-2 研究対象と方法

本稿は共時的研究であり、研究対象となるのは、現代日本語において「山が高い」「刺身が好きだ」といった表現の「ガ格」とその述語の構文関係である。このような構文に関して、これまでの研究はほとんど対格言語の立場から論じているが、上にも述べた通り、対格言語の観点を通しての分析には限界が存在する。したがって、本稿では従来とは異なる観点で考察を行いたい。

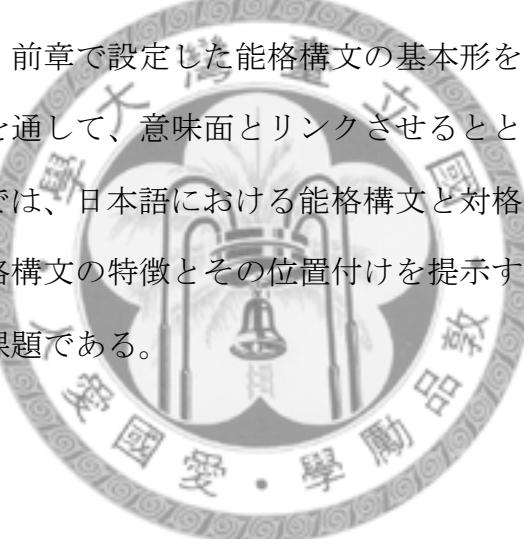
研究方法として、本稿では能格言語という視点を導入し、「ガ格」に対する扱い方の説明を試みる。さらに、「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」という生成文法の理論の枠組みを用いて、「ガ格」をめぐる能格的文法現象を統語面と意味面を通して考察する。言い換えれば、能格言語と生成文法の接点を見つけ、両者の理論を互いに結び付けさせることが本稿の研究手法なのである。

なお、本稿で用いる例文は、インターネット上で公開されている「青空文庫²」というウェブサイトから収集したものである。「青空文庫」は、著作権の消滅した日本語の文学作品をテキストファイル形式でそろえた電子図書館であり、検索エンジンを使えば、サイト内をキーワードで検索できる。

² 青空文庫ウェブサイト：<http://www.aozora.gr.jp/>

1-3 本論文の構成

本論文は 6 章で構成されている。第 1 章では、研究動機や研究対象など、本稿の位置付けについて述べる。第 2 章は先行研究の部で、これまで「ガ格」の研究概観、及び「能格」に関する文献を要約して紹介する。続いて、第 3 章から第 5 章までは、本稿の中心となる部分である。第 3 章は、「ガ格」の位置付けに関する考察であるが、まず能格言語から「能格」の本質を求めて、それを日本語に実証することを試み、「ガ格」の機能を改めて検討する。さらに、そのプロセスを通し、日本語における能格構文の基本形を設定する。第 4 章は、理論の枠組みの章であり、前章で設定した能格構文の基本形を「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」を通して、意味面とリンクさせるとともに、能格性述語の分類を行う。第 5 章では、日本語における能格構文と対格構文の違いを考察することによって、能格構文の特徴とその位置付けを提示する。第 6 章は、本論文のまとめと今後の課題である。





第2章 先行研究

2-1 「ガ格」研究概観

まず、これまで「ガ格」の研究を振り返ってみよう。「ガ格」は大槻（1897）をはじめ、多数の学者によって研究がなされてきた。その研究の流れは、主に二つの方向に分けることができる。一つは、構造主義の考え方で、代表的な学者に、橋本（1969）などがある。構造主義では、「ガ格」で標識された名詞句をすべて「主格」と見なす立場を取っている¹。もう一つは、時枝（1950）をはじめとし、久野（1973）などの生成文法学者に引き継がれ、現在主流の説となつた、「ガ格」名詞句を「主格」と「対象格」の二通りで扱うという考え方である。

構造主義は、主に形態という立場から統語現象を論じるので、「ガ格」を一つに認定する考え方は容易に想像が付く。しかし、形態面を出発点とした構造主義は、意味面をあまり考慮に入れないため、なぜ同じ形態のものが複数の統語機能を担うのか説明できないなどの点において、理論的には不十分なところが見られる。それに対し、「ガ格」を二つに分けて考えた時枝説は、後に生成文法という強力な理論に支持され、主流となつたのもそれなりの理由がある。本稿において、先行研究に関する検討も時枝説を中心に行う。次節より、現在主流となつた時枝の説を簡単に紹介し、その問題点を提示する。

2-2 時枝説とその問題点

時枝（1950：235–238）は、「ガ格」によってマークされた名詞句を、「主格」

¹ 「ガ格」をすべて主格標識と見なす考え方には、柴谷（2001）などの最近の研究にも見られるが、氏は構造主義の立場から論じたわけではない。これについては後述する。

と「対象格」の二分類に分けた。例えば、

- (1) 山が 高い。
- (2) 刺身が 好きだ。

氏は上記 (1) (2) の「ガ格」について、(1) を「主格」と、(2) を「対象格」と、それぞれ違うものとして扱った。その後、久野 (1973)、柴谷 (1978)、奥津 (1986)、三原 (2006) なども、生成文法の観点から「ガ格」を考察したが、「ガ格」を二通りに扱うことに変りはない。

ところが、以下の例を見てみよう。

- (3) 火事が こわい。
- (4) (私は) 火事が こわい。

(3) の「ガ格」は、果たして「主格」として捉えるべきなのだろうか。もし「主格」として認めるならば、「火事」は「こわい」という性質を帯びた主体になり、文全体は「火事は恐ろしいものである」と解釈することができる。しかし、(3) は (4) のように、「私は」という名詞句が省略された結果とも考えられる。その場合、「火事」は「こわい」という感情を引き起こす対象となり、(3) の「ガ格」は「主格」ではなく、「対象格」として解釈したほうが適切だと思われる。同じ述語、同じ「ガ格」にもかかわらず、見方によって違う扱い方が出る。つまり、「主格」と「対象格」の扱い方には、曖昧なところが見られるのである。

次の実例 (5) は、(3) (4) とは少し異質なものであるが、「ガ格」の解釈に

関しても曖昧なところがある。例文は山口（2000：223）による。

(5) 「この千鶴子さんはね君、ピエール氏が非常に好きだったんだよ。君はいつも傍にいたくせに、写真なんて機械に気を取られて、知らないんだろう」と云って笑った。「ピエール氏が好きか、を好きか、どっちだ」「さア、それはこの人に聞かなくちゃ」 (横光利一『旅愁』) (下線筆者)

下線部の「ガ格」は、「主格」として取るべきか、「対象格」として取るべきか、それは聞き手も動搖している。故に、「ピエール氏が好きか、を好きか、どっちだ」と問い合わせたのである。

時枝説の問題点を以下にまとめる。まず、一部の構文において、「主格」と「対象格」の認定が微妙で、明快に区別することができない。(3) - (5) に示したように、「ガ格」の解釈が曖昧になるため、格標識の認定が一致しない問題が生じる。さらに、「主格」と「対象格」を標識する名詞句は、意味範疇でそれぞれ行為の「主体」と「客体」に当たることが多く、いわゆる正反対の概念である。このような正反対の概念が、なぜ同じ格標識で示されるのかも疑問である。

これらの問題点の解決策は、能格言語の性質に求めたい²。近藤（2005：12-19）は、能格言語の観点を用いて、従来二通りで扱われた「主格」と「対象格」は連続的な存在で、ただ物事を見る視点の違いによると述べた³。それについては、次節より詳しく紹介する。

² 柴谷（2001）は、本稿と類似した能格パターンの観点を提示したが、主語を二つもつ「二重主語構文」という主張は本稿と考え方が違う。本稿の考え方については第3章で後述する。

³ 近藤が用いた用語は「主語」「目的語」であるが、筆者が確認した限り、氏が論じた「主語」「目的語」は、実は格レベルの「主格」「対象格」に相当するものだと考えられる。

2-3 能格言語とは

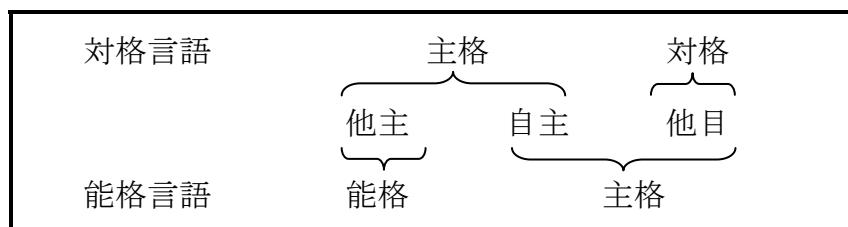
まず、能格言語について簡単に説明する。言語類型論では、世界中の言語を対格言語と能格言語の二種類に分ける。池上 (1981)、小泉 (1982)、角田 (1991)、近藤 (2005) などで、詳しく論じられている。その詳細は、図 2-1 に示す⁴。

図 2-1 対格言語と能格言語の格分布



対格言語では、自動詞文の主語（自主と略す）と他動詞文の主語（他主と略す）が同じ「主格」によって標識されるのに対し、他動詞文の目的語（他目と略す）が「対格」によって標識され、「主格」と区別する。そして、能格言語の場合は、自主と他目が同じ「主格」で標識されるのに対し、他主が「能格」で標識され、「主格」と区別する。その格体系を、図 2-2 に整理する⁵。

図 2-2 対格言語と能格言語の格体系



⁴ 近藤 (2005) を参考にして書き直したものである。

⁵ 小泉 (1982)、角田 (1983b) を参考にして書き直したものである。

実際に例文を作ってみると、以下のようになる。(6) (7) は対格言語、(8) (9) は能格言語の例である⁶。それぞれの深層意味表記を後ろに付けておく。深層意味表記は池上 (1981) によるものである。

(6) 花瓶が 割れた。 → x MOVE

(7) 太郎が 花瓶を 割った。 → y MOVE x

(8) 花瓶□ 割れた。 → x MOVE

(9) 太郎△ 花瓶□ 割った。 → y CAUSE [x MOVE]

分かりやすくするために、例文のイメージを図 2-3 に示しておく (筆者作成⁷)。以下、イメージ図を見ながら、近藤 (2005) の考え方を説明する。



	対格言語	能格言語
自動詞文		
	(6) 花瓶 <u>が</u> 割れた	(8) 花瓶□ 割れた
	x MOVE	x MOVE
他動詞文		
	(7) 太郎 <u>が</u> 花瓶を 割った	(9) 太郎△ 花瓶□ 割った
	y MOVE x	y CAUSE [x MOVE]

⁶ (8) (9) は日本語を仮に能格言語とした架空例である。格標識も架空のものを用いた。

⁷ 以下では、掲載されている図表は特に断りのない限り、当資料は筆者作成を示すものである。

人間は、いちばん最初に認知するもの、または最も重要だと思うものを「主格」（通常は無標）で標識するのが普通である⁸。図 2-3 を見れば分かるように、両言語類型（対格言語と能格言語）は自動詞文において、現れる名詞句が一つしかないため、「主格」は当然ながらその唯一の名詞句（ここでは「花瓶」に当たる）を標識することになる。

ところが、他動詞文では、名詞句が二つ（太郎と花瓶）に増えたため、「主格」をヒト（太郎）に置くか、モノ（花瓶）に置くか、その違いによって、格標識の配置が変わる。対格言語の他動詞文では、「主格」をヒトに置くが、能格言語の他動詞文では、「主格」をモノに置く。シルバースティーン（1976）の名詞句階層によると、階層の左端（ヒトに関する名詞句）からは「対格型格組織」が延びてくる一方、階層の右端（モノに関する名詞句）からは「能格型格組織」が生じてくる。要するに、対格言語で、ヒトは「主格」、モノは「対格」として捉えられやすいのに対し、能格言語で、ヒトは「能格」、モノは「主格」として認識されやすい。シルバースティーン（前掲）の説明は、正に（7）と（9）の格配置と一致している。

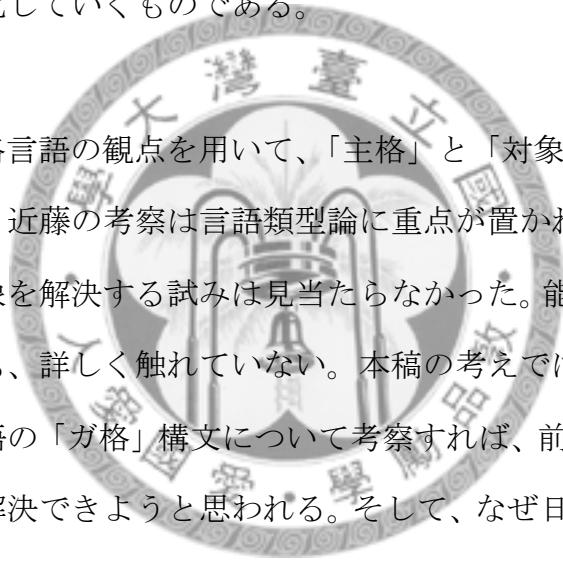
上述のように、（7）と（9）は言語類型によって格配置が異なる。しかし、語意内容的にはどちらの場合も同じ出来事を語っている。ただ、モノ（花瓶）は、焦点の置き方によって、対格言語では「対格」（統語的機能から見れば、時枝説の「対象格」に相当する）と、能格言語では「主格」と、それぞれ捉え方が分かれる。言い換えれば、「主格」と「対象格」は、図 2-4 のように、連続体として捉えることが可能である。

⁸ 現代日本語の場合、「主格」は有標の「ガ格」で標識するが、大野（1977）、山田（2010）などでは、昔の日本語において、「主格」は無助詞、いわゆる無標の「ゼロ格」で示されていた。

図 2-4 連続体としての「主格」と「対象格」



上図の線は、仮に左端を能格言語、右端を対格言語と設定しておこう。そして、(7) と (9) の例における「花瓶」はこの線では、左端に行くほど「主格」の性格が強く、右端に行くと少しずつ「対象格」の性格を帯びるようになる。即ち、連続的に変化していくものである。



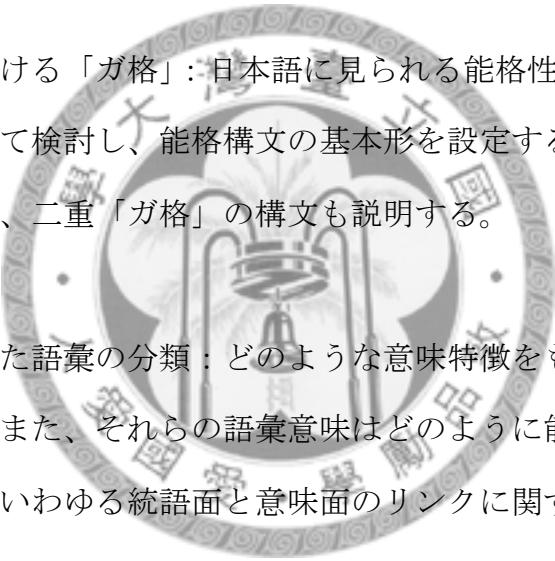
以上、近藤は能格言語の観点を用いて、「主格」と「対象格」の関係について説明した。しかし、近藤の考察は言語類型論に重点が置かれたため、日本語を取り入れて文法現象を解決する試みは見当たらなかった。能格言語が如何に「ガ格」と関わるのかも、詳しく触れていない。本稿の考えでは、この能格言語の観点をもって日本語の「ガ格」構文について考察すれば、前節で論じた「ガ格」をめぐる問題点も解決できようと思われる。そして、なぜ日本語は従来「主格」と「対象格」を同じ「ガ格」で標識するのかも、納得がいく。以上を踏まえて、本稿の目的は、能格の観点を取り入れ、能格構文における「ガ格」の役割を解明することにある。

2-4 本稿の立場

まず、簡単に先行研究をまとめるが、これまで「ガ格」の研究は、時枝が提示した「主格」「対象格」の二分類が主流である。しかし、(3) - (5) に示したように、時枝の説は「主格」と「対象格」の区別が曖昧な構文を説明するには

限界がある。

これを解決するために、本稿では能格言語の観点を取り入れて論じる。これまで、能格言語を対象にした研究はあるが、主に言語類型論の立場から論じたものが多く、日本語に導入して、文法現象、特に「ガ格」をめぐる問題を解決する試みはあまり見当たらなかった。故に、本稿は能格言語の性質を用いて、日本語の「ガ格」をめぐる能格的文法現象を考察し、改めて「ガ格」の機能を突き詰めたい。考察の重点は、以下の三点にある。



- (i) 能格構文における「ガ格」：日本語に見られる能格性を通して、「ガ格」の機能を改めて検討し、能格構文の基本形を設定する。それと関連する問題、例えば、二重「ガ格」の構文も説明する。
- (ii) 能格性を帯びた語彙の分類：どのような意味特徴をもつ語彙に、能格性があるのか、また、それらの語彙意味はどのように能格構文に反映されているのか、いわゆる統語面と意味面のリンクに関する考察である。
- (iii) 日本語における能格構文と対格構文の違い：日本語の能格構文は、対格構文とどう違うのか。また、その本質は何なのかを検討する。

(i) に関しては、能格構文における「ガ格」の位置付け、及びその周辺の問題を取り扱う。(ii) では、能格性をもつ述語は意味的にどのように統語と対応するのかを検討する。そして (iii) は、能格構文は如何に対格構文と区別するのかを論述する。以上の三つの課題は、それぞれ 3、4、5 章で検討していく。

2-5 用語の規定

これまでの研究では、「動作主」「主格」「主語」などの違うレベルの用語を混同して扱うことが多い。確かに、ほとんどの構文において、「動作主」「主格」「主語」が一致することが多いが、必ずしも一致するとは限らない。つまり、一对一の対応が存在しない。本稿は、「意味」「格」「文法」の三つのレベルを扱うため、厳密な用語規定が必要となる。本稿での用語は、角田（1991：167-169）の定義に従って規定する。例えば、「太郎が花瓶を割った」という文は、表 2-1 のように、異なるレベルにおいて、異なる用語を使うこととする。

表 2-1 用語規定の例示

	太郎が	花瓶を	割った
意味レベル	動作主	対象	—
格レベル	主格	対格	—
文法レベル	主語	目的語	—

意味レベルは、文中にある名詞句が表わす意味役割についての分類である⁹。上記の例では、「太郎」は「割る」という行為を行う役なので「動作主」であり、「花瓶」はその行為を受ける役なので「対象」である。そして、格レベルは、形態の面に注目する用語である。例えば、「太郎」は「ガ格」という形態で標識するので「主格」であり、「花瓶」は「ヲ格」という形態で標識するので「対格」である。ちなみに、具体的な形態が存在しない「ゼロ格」も格の一種である。最後に、文法レベルは、文法機能がどのように働くかということに注目して施す分類である。例えば、英語の「主語」が三人称単数の場合、「述語」には s を付けることが義務付けられるので、「主語」と「述語」には「一致」という文法

⁹ 生成文法や格文法において、深層構造に規定される θ 役割に相当する。

機能が働く。日本語の「主語」は、表面的にはあまり観察されないが、尊敬語化すると「述語」と「一致」が発生するので、観察されやすくなる。表2-1の例を尊敬語化すると、「太郎が花瓶をお割りになった」になる。この場合、「太郎」が尊敬表現「お割りになった」の先行詞になるので、文法的に「一致」が発生する。故に、「太郎」は「主語」として規定される。「目的語」も特定の検証法で定義することができる。一つ例を挙げれば、日本語においては、「目的語」の後ろに形式名詞の「こと」を挿入することが可能である。「私はあなた（のこと）を愛している」という文で示したように、「あなた」の後ろに「こと」を挿入できることから、「あなた」を「目的語」と規定できる。



まとめとして、本稿の用語は以下のように規定する。「～格」が付くものは「格レベル」のもので、「～語」の付くものは「文法レベル」のもので、そして、特に何も付かないものは「意味レベル」のものである。

第3章 能格構文における「ガ格」について

前章で、近藤（2005）は能格言語の性質を用いて、「主格」と「対象格」は連續体として捉えることが可能だということを述べた。しかし、近藤はそれを日本語の「ガ格」に実証する試みはしなかった。本稿はこれより、能格言語の性質を日本語に求めて、「ガ格」の機能を改めて検討したい。

3-1 日本語に見られる能格性

日本語は原則的に対格言語として扱われているが、以下に示したように、一部の構文において、能格言語の性質（能格性と略す）が見られる。これらの構文を「能格構文」という。まず、(1) (2) を見てみよう。



- (1) 私が 彼女を 好きだ。
- (2) 私が お酒を 飲みたい。

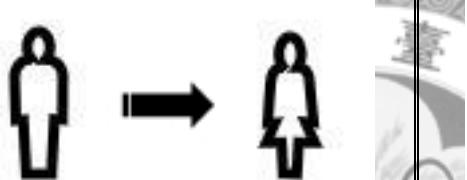
この場合、「私」は文法レベルで「主語」に当たり、格レベルで「ガ格」によつて示される。一方、「彼女」と「お酒」は文法レベルで「目的語」に相当し、格レベルで「ヲ格」によって標識される。しかし、(3) (4) はどうだろうか。

- (3) 私は 彼女が 好きだ。
- (4) 私は お酒が 飲みたい。

(3) (4)において、もともと「ヲ格」で標識された「彼女」と「お酒」は、(1) (2) で「主語」を表す「ガ格」によって示される。つまり、「目的語」として

認識された物は、「主語」と共通の格標識で標示されることになる。これは前節で紹介した能格言語の性質と同じである。分かりやすくするために、それぞれのイメージを、図3-1に示す。ちなみに、(1)(3)の述語は「好きだ」と、一つの形態素から成したもので、「単純形」と称する。一方、(2)(4)の述語は「飲み+たい」と、二つの形態素が結合したもので、「複合形」と称する。今回本稿で主に考察するのは、「単純形」の方である。

図3-1 日本語における能格構文のイメージ図

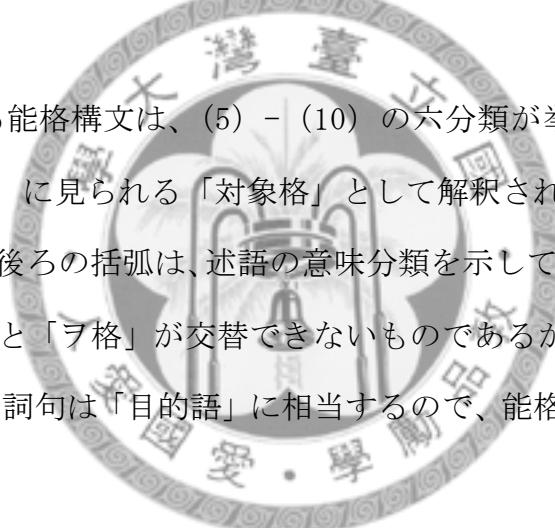
	対格構文	能格構文
単純形		
	(1) 私が 彼女を 好きだ y MOVE x	(3) 私は 彼女が 好きだ y CAUSE [x MOVE]
複合形		
	(2) 私が お酒を 飲みたい y MOVE x	(4) 私は お酒が 飲みたい y CAUSE [x MOVE]

上述の通り、図3-1の出来事を日本語で表現すれば、二通りの言い方がある。しかし、それぞれの格配置が異なる。例えば、「目的語」に相当する「彼女」と「お酒」は(1)(2)の場合では「ヲ格」で標識されるが、(3)(4)の場合では「ガ格」と、格標識が変わる。このように、「目的語」として認識された物が、「主語」と共通の格で標示されるという能格言語の特徴は、対格言語の日本語にも存在する。ただし、それはあくまでも一部の構文に現れるだけで、完全な

能格言語ではない¹。故に、厳密的には「能格言語の性質」としか言えない。略して「能格性」という。そして、「能格性」を帶びた構文を「能格構文」と呼ぶ。

ここで断つておくが、能格構文は必ずしも上に挙げた例のように、「ガヲ交替」で対を成すものではない。例えば、「日本語が上手だ」「お金が必要だ」のように、「ガ格」標識が片方の文だけに存在し、それと対応する「ヲ格」標識の文が存在しない例もある。しかし、これらの例でも、「ガ格」が標識しているのは文法レベル上「目的語」に相当するので、能格構文として認定できる。要するに、「ガヲ交替」で対を成すことは、能格構文の必要条件ではない。

日本語に見られる能格構文は、(5) – (10) の六分類が挙げられる。これは、久野 (1973 : 50–51) に見られる「対象格」として解釈された「ガ格」の例を整理したものである。後ろの括弧は、述語の意味分類を示している。その中で、(6) と (10) は「ガ格」と「ヲ格」が交替できないものであるが、文法レベル上「ガ格」がマークした名詞句は「目的語」に相当するので、能格構文と認められる。



- (5) 納豆が 嫌いだ。 (感情)
- (6) 日本語が 上手だ。 (能力)
- (7) 英語が 話せる。 (可能)
- (8) カメラが 欲しい。 (願望)
- (9) 窓が 開けてある。 (存在)
- (10) お金が 必要だ。 (必要)

¹ 二枝 (2007b) では、いわゆる能格言語でも、完全に能格構造が確立された純粹な能格言語は少ない。そのほとんどは、対格構文と能格構文が混在する性質をもつ。この性質を「分裂能格性」という。この定義に従えば、日本語は広い意味でも「分裂能格性」をもつと考えられる。

なお、上記の六分類に属する代表的な述語例を整理すると、以下の表 3-1 ができる。述語に対する意味の考察は次章で行う。

表 3-1 日本語における能格構文を成す述語

意味分類	語例
感情	好き、嫌い、怖い、悲しい、懐かしい、おかしい
能力	上手、下手、得意、苦手、分かる、見える、聞こえる
可能	できる、「可能動詞」、「～れる／～られる」
願望	欲しい、「～たい」
存在	ある、いる、「～てある」
必要	要る、必要

日本の能格構文に関する研究は、小泉（1982）、柴谷（1982）、角田（1983a、b）などによって始まった。角田（前掲）は、豪州の原住民語を例に、能格現象はどの文法カテゴリーに分布するかについて考察した。しかし、それは表面的現象に止まり、能格の本質までにはたどり着けなかった。その後、再び能格の本質について考察した研究には、二枝（2007b）がある。氏は、バスク語やオーストラリアの能格（諸）言語を対象として取り上げ、能格の本質は「行為・過程の出発点」を明記することにあると述べたが、それを日本語に実証しなかつた。次節は、二枝の説を踏まえて、日本語における「能格」の本質を論じたい。

3-2 「能格」の本質

二枝（2007b : 173-179）は、能格の本質は「行為・過程の出発点」を明記することにある、と述べた。その論証過程を以下のように要約する。

言語構造は、「主語から行為・過程が発せられ、主語の外に向かい目的語に到

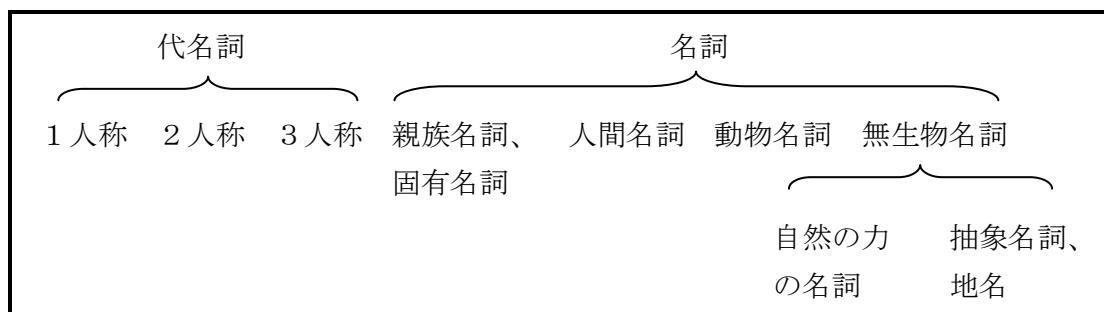
達する」という流れを最も自然に受け入れる。例えば、「彼女は熊を殺した」では、「彼女」は「主語」であり、「熊」は「目的語」であるが、エネルギーの流れから見れば、「彼女」は「行為・過程の出発点」であり、「熊」はその「到着点」である。このように、「主語から目的語へ」の流れと「出発点から到着点へ」の流れが一致するという構造が、最も自然な構文なのである。表3-2に整理しておく。矢印は、流れの方向を示している。

表3-2 自然な構文の流れ

	<u>彼女は</u>	<u>熊を</u>	<u>殺した。</u>
統語構造	主語	目的語	(主語から目的語へ)
行為・過程	出発点	到着点	(出発点から到着点へ)

しかし、人間は「活動性」と「限定性」の高い名詞句を「行為・過程の出発点」として捉える傾向がある。「活動性」とは、動作の行使者になりやすさの度合いである (Dixon : 1979)。そして「限定性」は、旧情報として特定されやすさの度合いと定義される (Trask : 1979)。これについては、シルバースティーン (1976) の名詞句階層で手際よく説明できるので、まず図3-2を参照しよう²。

図3-2 シルバースティーンの名詞句階層



² 名詞句階層はシルバースティーン (1976) によってはじめて提出された。もともとは英語版であったが、本稿で引用したのは、角田 (1991:39) による日本語版である。

二枝（前掲）によると、シルバースティーンの名詞句階層は、左側に行くほど「活動性」と「限定性」の程度も高くなる。逆に右の方に行くほど、その程度が低くなる。即ち、左の方にある名詞ほど、「行為・過程の出発点」になりやすい。例えば、日本語で「彼女は熊を殺した」が成立するのは、表3-3が示したように、「3人称」が「動物名詞」より「活動性」が高いので、「自然な構文の流れ」と「名詞句階層の流れ」が右向きに一致しているからである。

表3-3 名詞句階層に従う構文

	<u>彼女は</u>	<u>熊を</u>	<u>殺した。</u>
統語構造	主語	目的語	
行為・過程	出発点	到着点	
名詞句階層	3人称	動物名詞	

表3-3において、二つの矢印が同じ方向を向いているので、自然な日本語として受け入れるが、もし「彼女」と「熊」を入れ替えて、「熊は彼女を殺した」にすると、不自然な日本語になってしまう。それは、「熊」より「彼女」の方が「行為・過程の出発点」として認識されやすいので、「熊」が「主語」の位置に立つと違和感が感じられるからである。表3-4を参照しよう。

表3-4 名詞句階層に違反する構文

	<u>熊は</u>	<u>彼女を</u>	<u>殺した。</u>
統語構造	主語	目的語	
行為・過程	出発点	到着点	
名詞句階層	動物名詞	3人称	

ところが、能格言語では「活動性」と「限定性」の低い名詞句が「行為・過程の出発点」になることがある。その場合、誤認識を回避するために、特にそ

れを「行為・過程の出発点」であると明記する必要が生じる。この役目を果たす有標格が「能格」である。

その例として、二枝が挙げたのは Kham 語である³。下記の例文において、「対格」は「OBJ」と、「能格」は「ERG」と、それぞれ略記する。

(11) nga	nan-lay	nga-poh-ni-ke.	
I	you-OBJ	1A-hit-2P-PERF	'I hit you'
(12) nan	no-lay	na-poh-ke.	
you	he-OBJ	2A-hit-PERF	'You hit him'
(13) no-e	nan-lay	poh-na-ke-o.	
he-ERG	you-OBJ	hit-2P-PERF-3A	'He hit you'

格標識は明らかに分裂能格性に従っている。そして、(11) (12) の例は、どちらも「主語から目的語へ」と「出発点から到着点へ」の流れが一致する。例えば、(11) では、二人称の you より、一人称の I の方が「活動性」の程度が高いので、「行為・過程の出発点」として認識されやすい。(12) も、三人称の he より、二人称の you の方が「行為・過程の出発点」として捉えられやすい。故に、(11) も (12) も「主語」は無標識の「ゼロ格」のままである。それに対し、(13) では、you より「活動性」の低い he が「行為・過程の出発点」になってしまふ。この場合、「活動性」の高い you は「行為・過程の出発点」として誤認識される可能性があるため、he が「行為・過程の出発点」であることを明記する必要が生じる。そこで付けた格標識は「能格」である。

³ 例文は二枝が DeLancey (1981) から引用したものである。

以上見てきたように、人間は一番効率的な方法で、言語に格標識を付与する傾向がある。一番自然と考えられるものには無標、逆に特殊と考えられる場合は有標となる。「能格」自体はそのために存在する格標識だと考えられる。結論として、「能格」は「行為・過程の出発点」を明記するための格標識だということが明らかになった。次節は、二枝によって解明された「能格」の本質を日本語に導入し、日本語における能格構文の基本型を考察する。

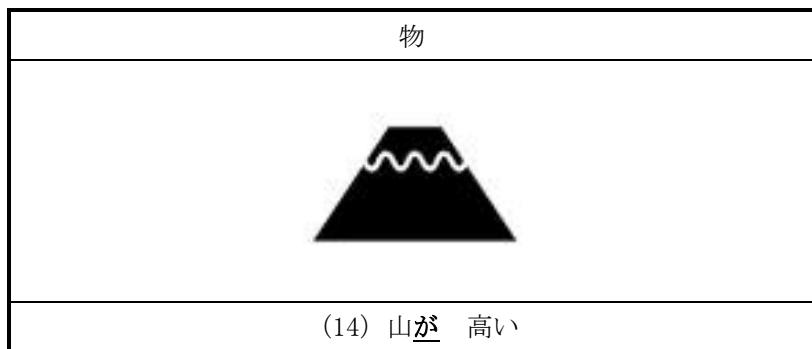
3-3 能格構文における「行為・過程の出発点」

前述のように、二枝（2007b）は能格の本質は「行為・過程の出発点」を明記することにあると論じたが、それを日本語に実証しなかった。本節では、二枝（前掲）で説明した能格の本質を日本語に導入し、能格的文法現象を検討したい。まず、「行為・過程の出発点」という観点を用いて、先行研究で論述した例文を逐次的に考察していく。

(14) 山が 高い。

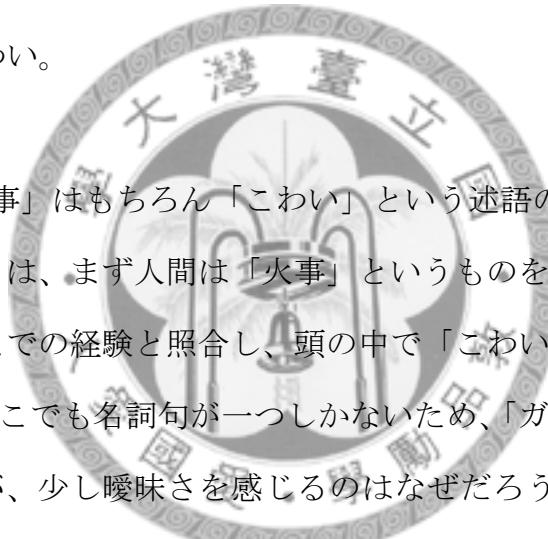
(14) の場合、「高い」という述語の意味内容をもっているのは「山」である。それが言語化されるまでの認知ルートを、以下のように想定できる。まず、人間は「山」を目で映す過程を経てはじめて、「山」というものを認知し、それから今までの経験と照合してから、頭の中で「高い」という判断を下したのである。また、この文にある名詞句は「山」しかないので、「ガ格」はそこに置くしかない。故に、「ガ格=主格」は唯一の項である「山」を標識したと考えられる。認知ルートのイメージを図示すると、図3-3になる。

図 3-3 認知ルートのイメージ図（高い）



しかし、(15) の例になると、状況は少し違う。

(15) 火事が こわい。

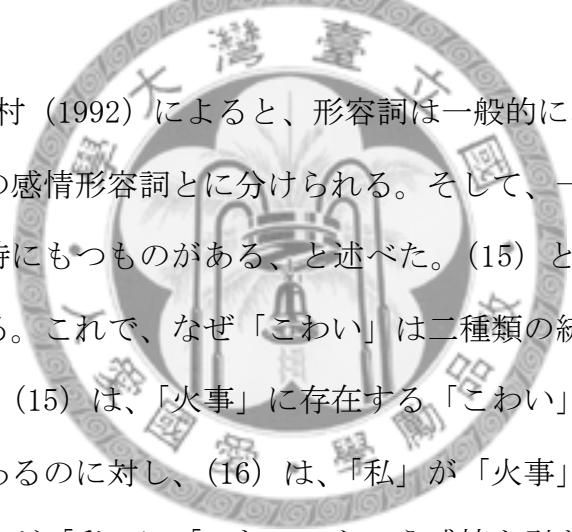


(15) の場合、「火事」はもちろん「こわい」という述語の意味内容をもつている。その認知ルートは、まず人間は「火事」というものを目に映して、それを認知してから、今までの経験と照合し、頭の中で「こわい」という判断を下したと想定される。ここでも名詞句が一つしかないため、「ガ格=主格」は「火事」を示すことになるが、少し曖昧さを感じるのはなぜだろう。それは、「こわい」という述語は、潜在的に「誰か」という名詞句の存在が感じられるからである。その「誰か」という名詞句を明示化した結果は (16) である。

(16) 私は 火事が こわい。

(16) の場合、その認知ルートは以下のように想定される。まず「火事」というものを目に映して、それを認知してから、今までの経験と照合し、頭の中で「こわい」という判断を下した。ここまで的过程は (15) と全く同じであるが、もしその「こわい」という判断がその人に感情を起こさせたら、人は「こわい」

という感情を外に発散し、その結果は（16）になる。（15）では、名詞句が一つしかないが、（16）では名詞句が二つに増えた。しかし、本来（16）は（15）をもとに何かを付加することによって派生した文なので、名詞句が二つに増えても「ガ格」は（15）と同じく、「火事」に置かれるはずである。そこで、新たに現れた名詞句「私」には、統語的に「ガ格」とは別に、何か新しい格標識を付与することが必要となる。ここでは、「私」という名詞句は、意的的に感情を発する場所として解釈できるので、前節で考察した能格の本質、つまり「行為・過程の出発点」と共通していると考えられる。そのため、「行為・過程の出発点」を明記する点において、「私」を標識する格を「能格」として定義付けられよう。



西尾（1988）、寺村（1992）によると、形容詞は一般的に、客観叙述の属性形容詞と、主観叙述の感情形容詞とに分けられる。そして、一部の形容詞において両方の性質を同時にもつものがある、と述べた。（15）と（16）の「こわい」は正しくそれである。これで、なぜ「こわい」は二種類の統語構造が存在するのかを説明できる。（15）は、「火事」に存在する「こわい」という属性を客観叙述にした結果であるのに対し、（16）は、「私」が「火事」というものを感じて、そして「火事」が「私」に「こわい」という感情を引き起こした主観叙述である。両者の認知ルートとしては、以下のようにまとめることができる。

まず、プロセスは「火事」から始まり、それから人間に投射して、認知される。そして、もしそこで止まれば、（15）のような客観叙述になる。しかし、もしそこで終わらないで、人間は何かの感情が引き起こされた場合、「認知のルート」は外に向って発散し、（16）のような主観叙述になる。（15）と（16）の文をそれぞれイメージ図にして比較しよう。

図 3-4 認知ルートのイメージ図（こわい）

物	人→物
(15) 火事が こわい	(16) 私は 火事が こわい

図 3-4 を見て、ある現象が観察される。それは、「ある対象物が触発物として存在し、それを人間が感じ」、そして「心から感情を発した」という流れである。その統語的派生順序は、一項構文の「物」から、二項構文の「人→物」へと変化する、と想定できよう。上図に示したように、一項構文では名詞句は「物」しかないので、焦点はそこに置かれるが、二項構文ではエネルギーの流れは「人」から「物」へと発するので、もともと「物」に置かれたはずの焦点が、「活動性」の高い「人」に移ったという視点転移の現象が生じる。これまでの先行研究は、「人」を「主格」と認定するのも、このことに由来するのだろう。しかし、格標識は形態レベルのもので、必ずしも文法レベルの焦点を反映するわけではない。本節の観察では、一項構文と二項構文は別々に出来たものではなく、順序的に派生関係をもっているので、「ガ格=主格」は一項構文でも二項構文でも、同じ名詞句、つまり「物」に置かれるはずである。それと関連して、新たに現れた名詞句「人」は「主格」ではなく、「行為・過程の出発点」を明記する「能格」として解釈した方が適切である。

このように、「ガ格」として認識される名詞句の他に、新しい別の名詞句が加わることによって、「行為・過程の出発点」であることを明記する必要が生じてくる。この点において、二枝が主張した「能格の本質」と共通性が見られる。

したがって、二枝の説を日本語に応用することも可能だと思われる。

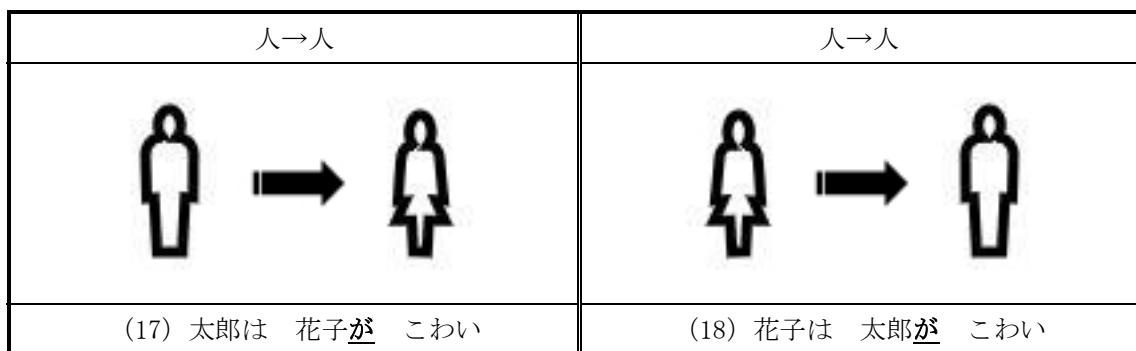
「行為・過程の出発点」を明記する点に関しては、二つの名詞句の「活動性」がほぼ同じ場合、例えば、両方とも「人」の場合は、より明らかに観察できる。次の二例を比較してみよう。

(17) 太郎は 花子が こわい。

(18) 花子は 太郎が こわい。

(17) (18) では、名詞句は「太郎」と「花子」との二つがある。しかも、同じ人間である三人称の名詞句なので、活動性はほぼ同じである。この場合、どちらが「行為・過程の出発点」なのかを知る手掛りは、前後文脈の他に、形態による標識に頼るしかない。本節で述べたように、「能格」によって標識された名詞句は、新しい「行為・過程の出発点」であることを示しているため、(17) は「太郎は花子に対して、こわい気持ちを抱いている」と解釈することができる。逆に、(18) は「花子は太郎に対して、こわい気持ちを抱いている」というように読み取れている。その認知ルートを下のように図示する。

図 3-5 認知ルートのイメージ図（こわい）



以上の論述から分かったように、能格構文の二項構文における二つの名詞句は、文中において統語性質が異なるので、本稿ではそれぞれ「能格」と「主格」として区別して考えている。次節より、「能格」と「主格」をそれぞれ日本語の構文に設定する場合は、どのように位置付けられるかを論じる。

3-4 日本語における「能格」と「主格」の位置付け

以上考察したように、日本語の能格構文は「行為・過程の出発点」という点において、二枝が論じたものと共通点が見られる。残った問題は「能格」標識である。日本語は能格構文の構造に関して、ほとんど他の能格言語と同じであるが、違う点は一つある。それは、日本語は他の能格言語のように、「能格」として新たな格標識が現れないことである。本節ではこの点について論述する。

もう一度 (15) (16) の例を見よう。従来の文法理論で、(15) (16) の「火事」に付く「ガ格」はそれぞれ「主格」「対象格」として捉えられるが、能格言語の観点を導入することにより、それらをすべて「主格」として認識することが可能となる。ただし、そうすると (16) の「私」に付く格標識をどう扱うかは問題となる。なぜなら、「私」を標識するために、新たな格標識として「能格」が現れるように要求されるはずだが、「私」の後に付くのは副助詞の「ハ」である。しかも、「ハ」は日本語にすでに存在したものであり、新たなものではない。今までの研究は、この「ハ」の扱い方について、以下のような考え方がある。

- (i) 格助詞「ニ」が消去されて残ったもの
- (ii) 「ハ」自体が「能格標識」である

(i) の考え方について、池上（1981）は次の例をもって説明してある。

(19) ボクハ ウナギダ

(20) ボクニ (ハ) ウナギダ

場所理論によると、日本語では名詞句が主題化されるとそれに伴っている格助詞は消去されうるということがある。それにしたがって(20)より格助詞の「ニ」が消去され、代りに係助詞の「ハ」が導入されると、結果的に(20)は「ボクハウナギダ」となり、(20)は(19)と表層的に同一になる。

しかし、この考え方には問題がある。久野（1973：51-52）によると、この類の構文をすべて「ニ」格に還元することができない。例えば、(21)を(22)に還元することが不可能である。例文は久野（前掲）から引用したものである。

(21) 誰ガ 英語ガ 上手デスカ。

(22) *誰ニ 英語ガ 上手デスカ。

例文に示した通り、まず「ニ」があって、それを主題化して、「ニハ」になるとともに「ニ」が消去され「ハ」だけが残るという(i)の説には問題点が存在する。それでは、(ii)はどうだろうか。まず、次の例文を見てみよう。

(23) 春子は リンゴが 好きだ。 (下線筆者)

小泉（1982：88）は、(23)という例を挙げて、以下のように述べている。

「春子はリンゴが好きだ」という表現は、「春子がリンゴを好きだ」という基底文から、主格の「が」を主題化して「は」に替え、対格の「を」を表層で助詞「が」に改めて出来たものではなく、「春子は」の能格的「は」と「リンゴが」の主格「が」はいずれも深層において直接に格の指定を受けた生み出されたものと考えられる。

小泉の主張に従えば、「ハ」の後ろには、他に「格」のような成分が存在しない。つまり、「ハ」自体が「格」として機能することになる。しかしながら、周知のように、「ハ」は日本語文法において、「格助詞」ではなく「副助詞」に分類されることが一般的である。故に、「ハ」は「格」として機能しないはずである。小泉の説は、日本語文法の助詞理論に違反するため、本稿はそれに従わない。その代わり、三つの可能性を提案する。

(iii) 能格標識「△」が「ハ」の後ろに隠された

前述の通り、「ハ」は、もとの格成分を覆い、主題化する性質をもっている。そして(16)では、新たな出発点が現れることにより、もともと「私」を出発点と明示するための能格標識として、何かの新たな「格助詞」が生まれるはずなのだが、「ハ」が先に主題化機能として働いたので、新しい格標識「能格」は「ハ」の後ろに隠されて、具現化されなくなる。

「ハ」が先に主題化を機能して格標識が具現化されないことについては、以下の三点を挙げて裏付けよう。第一に、野田(1996:75-82)によると、「ハ」には破格の主題構文が存在する。例えば、(24)を見よう。

(24) このにおいは ガスが 漏れてるよ。 (下線筆者)

(24)において、「におい」は述語「漏れてる」とは何の格関係も成立しない。即ち、「ハ」の後ろには何の格標識も存在しない。いわゆる「ゼロ格」なのである。そこから分かるように、「ハ」の主題化機能は、格標識が規定されるより先に働く。もし先に格標識が規定されたとしたら、(24)のような「ゼロ格」を主題化した文は成立しないはずである。

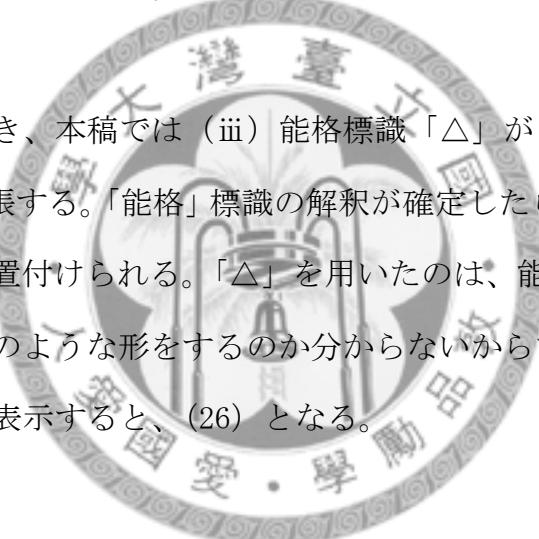
第二に、能格候補の名詞句は主題化される理由が極めて高い。なぜかというと、それは「活動性」と「限定性」の高い名詞句がほとんどだからである。シリバースティーン (1976)、角田 (1991) に見られるように、名詞句階層では、人間であればあるほど、「活動性」と「限定性」が高くなっていく。そして、主題化が働く最も重要な条件は、「限定性」なのである。見てきた通り、「能格」が付く名詞句は「行為・過程の出発点」になりやすい「限定性」の高い人間であるので、主題化が稼動する条件は能格構文において十分にそろっている。

第三に、生成文法において、格の付与は名詞と動詞の関係に基づくため、本稿で設定した「能格」も実は「ゼロ格」と同じで、わざわざ独立させる必要性がないのではないか、という疑問も考えられるが、以下の例文の分析において、「能格」を区別することに意義があると思われる。

(25) 小林さんは 奥さんが こわい。

(25)の文は、二つの意味をもっている。一つは「小林さん」を「ゼロ格」と見なす解釈である。この場合、文の意味は「小林さんの奥さんには、こわいと

いう性質を有している」として読み取れて、いわゆる「象は鼻が長い」と同じ構文なのである。しかし、この文には「小林さんは、奥さんに対してこわい気持ちを抱いている」という別の解釈も存在する。二つ目の意味に関して、もし「小林さん」を「ゼロ格」と見なしたら、意味的に一つ目と同じになるため、両者における統語構造の違いを説明できない。この文では、小林さんが奥さんに対して「こわい」という感情を発したため、やはり「行為・過程の出発点」を明記する「能格」で説明しなければならない。つまり、(25) は表層では一つの構造を成しているが、深層では二つの構造が想定される。故に、格も別々に設定した方が適切だと思われる。



以上の理由に基づき、本稿では (iii) 能格標識「△」が「ハ」の後ろに隠された、という説を主張する。「能格」標識の解釈が確定したら、関連して「ガ格」も「主格」として位置付けられる。「△」を用いたのは、能格標識が隠されて現れなかつたため、どのような形をするのか分からなかつたからである。(16) の文を還元させて文構造を表示すると、(26) となる。

(26) 私は (△) 火事が こわい。

まとめとして、上記の文では、「私」を「能格」とし、そして「火事」を「主格」と位置付けることが可能である。

3-5 二重「ガ格」について

最後に、いわゆる二重「ガ格」について論じよう。

(27) 私の方が 日本語が 上手だ。

(28) 健ちゃんが くもが 嫌いなことは 知ってたよ。

二重「ガ格」とは、(27) (28) のような、「ガ格」が二つ存在する構文のことである。なぜ論じる必要があるのか。それは、本稿の立場は、「ガ格」をすべて「主格」と認定することなので、二つの「ガ格」が存在する構文は、それぞれどのように扱うべきか、説明する必要があるからだ。

(27) にある二つの名詞句、「私の方」と「日本語」はどちらも「ガ」を取るが、それらは「主格」なのかというと、そうではない。野田(1996:256-265)は、「ガ」は「格助詞」の用法の他に、「排他」と「従属節用法」の使い方がある、と述べている。「排他」とは、「他ではなく、コレこそだ」を特に強調したい時に使う表現なのである。(27)の例がそれに該当する。日本語が上手な人は、他ではなく、この「私」こそだ、というニュアンスが読み取れる。

(28) の例は、野田(前掲)が主張した「ガ」のもう一つ、いわゆる「従属節用法」なのである。これは、「ハ」に標識されたものは文末の述語に係る性質があるので、従属節において誤解を回避するために、「ハ」の代わりに「ガ」が代用されることをいう。(28)では、「健ちゃん」はもともと「ハ」が付いたものなのだが、従属節に置かれるため、「ハ」のままでは文末の「知ってた」に係ってしまう。故に、代わりに「ガ」が起用されたのである。これで「健ちゃん」が係る述語は「嫌い」だということが分かる。

「排他」と「従属節用法」はどちらも「格助詞」として機能するのではなく、副助詞的な働きをもっている。そのため、(27) (28)において「私の方」と「健

ちゃん」に付く「ガ」は「能格」標識ではない。能格標識は、依然として副助詞的な「ガ」の後に隠れて、現れなかつた。(27) (28) をそれぞれ還元させて構造を示すと、(29) (30) になる。

(29) 私の方が (△) 日本語が 上手だ。

(30) 健ちゃんが (△) くもが 嫌いなことは 知ってたよ。

結論として、日本語の能格標識は、いかなる場合においても隠されるため、表層に現れる必要がないということが言える。しかし、(25) のように、深層構造では潜在的に存在すると考えられるので、やはり設定する必要がある。そして、「能格」を日本語に設定することによって、改めて「ガ格」の機能を「主格」として一つにまとめることができるわけである。

3-6 まとめ

本章は、能格言語の観点から始まり、そこから日本語に見られる能格性を導き出した。さらに、能格の本質を用いて、日本語の「ガ格」の扱い方は、一つだけで済ませることができると論じた。また、それと関連する問題、例えば、能格標識及びその周辺の格問題についても論述した。本章の中心思想を簡単に要約すると、以下のようになる。

人間は、常に自我を中心とする考え方をするので、感情表現に係わると、物事中心（物）の考え方も立場が逆転し、人間中心（人→物）の考え方になる。ここで、「物事中心」と「人間中心」という考え方は、それぞれ寺村（1992）で論じた「客観叙述」と「主観叙述」に相当している。つまり、もともと物事か

ら始まったプロセスが、人間に達して、まず「客観叙述」が成立する。そして、もしプロセスがそこで終わらないで、人間は何かの感情を引き起こさせたら、プロセスはまた人間から外に発散して、今度は「主観叙述」が成立する。それが統語に反映された結果は、もともと「客観叙述」において「ガ格」で標識された物の他に、「主観叙述」になると新たな「行為・過程の出発点」である人間が現れるので、それをマークするために新しい格標識が生じることである。そこで、この格標識は「行為・過程の出発点」を明記する点においては、二枝で考察した「能格の本質」と同じであるゆえ、「能格」を日本語に位置付けることが可能となる。「能格」が設定できたら、従来では「対象格」と扱われた「ガ格」も改めて「主格」として設定することができる。即ち、「ガ格」の機能は「主格」の一つで済ませる。



しかし、ここで問題となるのは、日本語には「能格」として新たな格標識が現れないことである。その原因是、格助詞を被せる副助詞「ハ」が存在するからだと考えられよう。日本語の能格構文の場合、能格候補の名詞句はもともと「人間」しかもたない感情による「行為・過程の出発点」なので、「人間」である確率は百パーセントと言える。さらに、「人間」はシルバースティーンの名詞句階層において、上位に立っている。つまり、限定性が高く、旧情報として認知される可能性が極めて高い。そこで、能格標識が現れる必要がなく、高い限定性を有する人間として一番用いられやすい、旧情報を示す「ハ」で標示することになる。また、それと関連する、二重「ガ格」の問題は、「排他」や「従属節用法」で解釈できると思われる。

本章の結論として、能格構文の基本形とその発生過程については、以下のことが言える。能格構文の基本形は、まずある性質をもつ物体が存在し、それか

ら人間が現れ、それを認知してから感情を発した、と定義付けられる。即ち、「客観」から「主観」へと変化するプロセスが、能格構文の発生過程である。

最後に、能格構文の基本形とその統語構造を、以下の図 3-6 にまとめておく。次章は、能格構文の統語構造が、意味的にどのように能格性をもつ述語と対応するのかについて考察する。

図 3-6 能格構文の基本形と統語構造

イメージ	物						人→物					
	一	一	火事	が	こわい	私	は△	火事	が	こわい		
助詞	—	—	対象	格助詞	述語	動作主	副助詞+格助詞	対象	格助詞	述語		
機能	—	—	主格				主題+能格		主格			



第4章 能格性述語の意味による分類

第3章では、能格性を通して日本語の「ガ格」をめぐる統語構造を見てきた。そして、最も重要なポイントは、「まずある性質を帯びた物体が存在し、それから人間が現れ、それを認知してから感情を発する」という能格構文の発生過程である。最初に視野に入ったのは物体のため、「ガ格」は当然ながらその物体の標識に使われた。さらに、後に加わった人間には「行為・過程の出発点」を明記する必要が生じたので、新たな格標識として「能格」が必要となる。

ただ、そのような能格構文の統語構造は、意味的に如何に能格性をもつ語彙（以下「能格性述語」と略す）と対応するのかはまだ明らかではない。この問題を解明するために、やはり意味の領域に立ち入る必要がある。本章は、まず「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」という理論の枠組みを取り入れて、能格構文を意味面から考察し、最後にその結果をもとに能格性述語の分類を行う。

4-1 理論の枠組み

第3章で、能格構文の基本形を設定したが、まだ未解決な問題が残っている。それは、同じ能格性述語にもかかわらず、述語によって取れる統語構造のパターンには、基本形からずれるものもあり、様々であることだ。この現象は、能格性述語の間にも、違う性質が存在することを意味している。例えば「こわい」という述語には、

- (1) 火事が こわい。
- (2) 私は 火事が こわい。

(3) 私は こわい。

と、三通りの統語構造のパターンがある。(1) は、「火事」が「こわい」という性質を帯びていることを意味する。(3) は、「私」が「こわい」という気持ちを抱いているとして読み取れる。そして(2) は、状況に応じて(1) にも(3) にも解釈することが可能である。第3章の能格構文の基本形は、(1) から(2) までの過程を説明できるが、(3) については説明が足りない部分がある。また、他のパターンを取る述語も見られる。例えば、

(4) 彼女が 好きだ。

(5) 私は 彼女が 好きだ。

(4) は(1) と同質のものとは考えにくい。なぜなら、(1) は「こわい火事」という装定表現に互換できるのに対し、(4) は「好きな彼女」に言い換えると、意味的に不安定になり、「私が好きな彼女」のように、「誰かが」を補う必要があるからだ。そのため、(4) は(5) から「私は」が省略された結果に見える。しかし、もしそうであれば、(4) は最初から存在しないことになり、能格構文の基本形に当て嵌まらなくなる。

以上示したように、第3章の能格構文の基本形を成立させるには、すべての能格性述語がこの基本形に適用できることを理論付けなければならない。そのため、本章はまず「非対格性の仮説」を取り入れ、「外項」と「内項」の概念を説明する。次に、「語彙概念構造」を導入し、「外項」と「内項」は如何に統語構造と対応するのかを見る。また、上に挙げた、述語によって違う統語構造が生じるという問題を明らかにするには、やはり意味の考察を行う必要があると

思われる所以、本稿では「語彙概念構造」を用いて、能格性述語の意味面を統語面とリンクさせる一方、能格性述語を体系的に分類・整理する。

4-1-1 非対格性の仮説

「非対格性の仮説」は関係文法および変形文法 GB 理論で発見された説である。それをはじめて提出したのは Perlmutter (1978) であった。その後、この仮説は西洋言語だけではなく、いろいろな言語にも実証された。影山 (1993)、岸本 (2005) なども、それを日本語に取り入れ、その適用性を証明した。内容については、簡単に要約すると、以下のようになる。

「非対格性の仮説」は一言で言えば、自動詞を「非能格動詞」と「非対格動詞」との二種類に分ける仮説である。伝統的な考え方では、自動詞は統語構造において、他動詞と以下のような対応関係が想定される。

(6) 他動詞文： 主語 目的語 他動詞
自動詞文： 主語 自動詞

つまり、「自動詞文の主語」と「他動詞文の主語」を、統語構造で同一物として扱うことになる。しかし、このような考え方は、非常に表層的な観察である。実際に自動詞構文を分析すると、「自動詞文の主語」は統語的に「他動詞文の主語」に対応する場合と、「他動詞文の目的語」に対応する場合があることが、後の研究で分かった。例えば、下に挙げた結果構文という統語現象の例である。以下の例文は、影山 (1996 : 26-28) をもとに書き直した。

(7) 太郎が 花瓶を 粉々に 割った。

(7) は、「太郎が花瓶を割って、花瓶が粉々になった」と解釈できる。「粉々に」は目的語「花瓶」の結果を修飾しているため、結果述語という。結果述語の修飾先は、他動詞文の目的語でなければならない。例えば、

(8) *太郎が 花瓶を クタクタに 割った。

(8) においては、「太郎が花瓶を割って、太郎がクタクタになった」という解釈にはならない。これで、結果述語は他動詞文の主語ではなく、目的語を修飾することが分かった。それでは、次の例を見よう。

(9) 花瓶が 粉々に 割れた。

(9) は (7) (8) と違って、自動詞文であるが、結果述語「粉々に」が修飾しているのは、自動詞文の主語「花瓶」であることが観察される。「花瓶が割れて、(花瓶が) 粉々になった」と解釈することができる。ところが、

(10) *太郎が クタクタに 働いた。

(10) は (9) と同じ、自動詞文であるが、結果述語「クタクタに」は、自動詞文の主語「太郎」を修飾できない。つまり、「太郎が働いて、(太郎が) クタクタになった」と解釈することができない。

(9) (10) を見て言えるのは、同じ自動詞にもかかわらず、「割れる」と「働

く」は性質が違うことだ。そして、その異なる性質は統語構造にも反映されている。上述の通り、自動詞文 (9) の主語は、結果述語で修飾できることから「他動詞文の目的語」と同じ振る舞いを示すことが分かった。それに対し、自動詞文 (10) の主語は、結果述語で修飾できない点において「他動詞文の主語」と同じ振る舞いを示すと考えられる。Perlmutter (1978) は、例文 (9) のタイプの自動詞を「非対格動詞」、例文 (10) のタイプの自動詞を「非能格動詞」と呼ぶ¹。これまでの論述を整理し、自他動詞の統語的対応関係を (11) にまとめる。

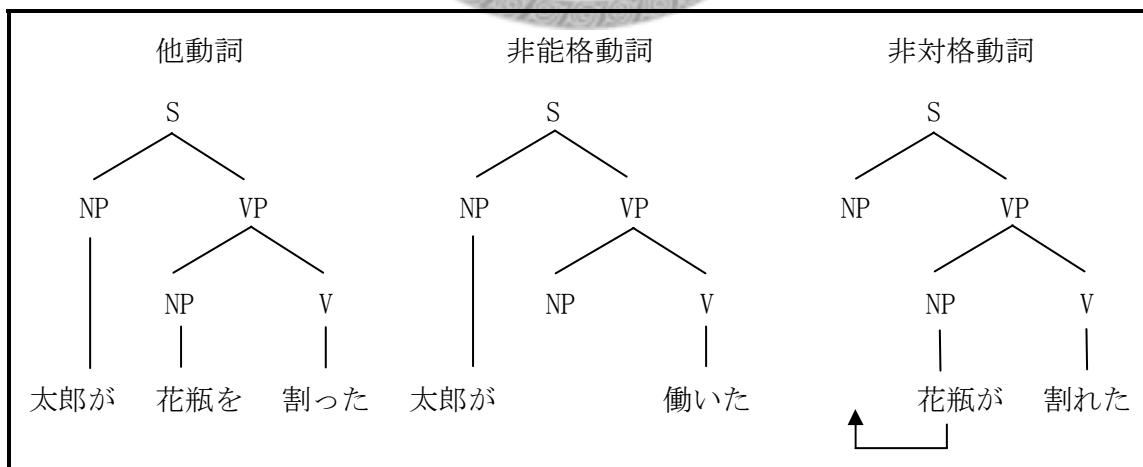
(11) 他動詞文： 主語 目的語 他動詞

非能格動詞文： 主語 自動詞

非対格動詞文： 主語 自動詞

なぜこのような違いが生じるのか。これについては、以下の枝分かれ構造で説明する。図 4-1 は、影山 (1996: 19) を参考にして書き直したものである。

図 4-1 自他動詞における枝分かれ構造

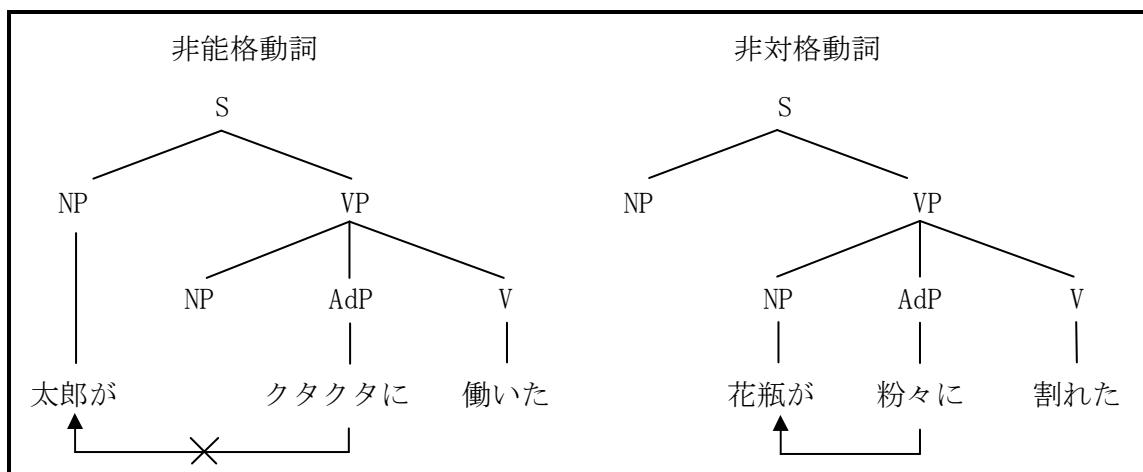


¹ 日本では、すでに三上 (1972) が、自動詞を「能動詞」と「所動詞」との二種類に分けたが、ここでの「非能格動詞」と「非対格動詞」とほぼ対応している。

生成文法は、「非能格動詞」と「非対格動詞」の主語を、D構造において違うものとして設定する。「非能格動詞」の場合、主語は初めからSの指定部に位置する。図4-1を見れば分かるように、「非能格動詞」の枝分かれ構造で、「太郎」という名詞句は、最初からSのすぐ下のNP(Sの指定部)に位置する。それに對し、「非対格動詞」の場合、主語はVPの下、つまり他動詞文の目的語に相当する場所に位置し、それからS構造として言語化されたとき、Sの指定部は空欄のままでは不適格になるため、変形規則に従い、Sの指定部に移動したのである。図4-1における「非対格動詞」の枝分かれ構造を見れば、「花瓶」という名詞句がSの指定部に移動した矢印が見られるはずである。

これで、なぜ「結果構文」が自他動詞文において違う統語現象を起こすのかについて解釈できる。「非対格動詞文の主語」は、もともと「他動詞文の目的語」と同様、VPの下に位置するので、同じ階層にある「結果述語」によって統御される。しかし、「非能格動詞文の主語」は、Sの指定部にあるため、次の階層にある「結果述語」によって統御されない。詳しくは図4-2を参照する。

図4-2 結果述語による修飾構造



上述のように、自動詞を「非能格動詞」と「非対格動詞」に分けるのは「非

対格性の仮説」の主な内容である。そして、自動詞を二種類に分類するので、二種類の自動詞主語を区別する用語が必要となる。そのため、「主語」「目的語」という表層構造（S構造）に使われた用語の代わりに、深層構造（D構造）において「外項」「内項」という用語が規定された。「外項」だけをもつ自動詞は「非能格動詞」、「内項」だけをもつ自動詞は「非対格動詞」というように、それぞれ定義付けられる。以上に述べた表層構造と深層構造の用語における対応関係を正確に表記すると、次の表4-1になる²。

表4-1 表層構造と深層構造の用語対応

	外項	内項	
他動詞文：	主語	目的語	他動詞
非能格動詞文：	主語		自動詞
非対格動詞文：		主語	自動詞

以上、結果構文を通して、「非対格性の仮説」をめぐる統語現象を観察してきた。このように、「非対格動詞文の主語」が「他動詞文の目的語」と同じ振る舞いを示す現象を「非対格性症候群」という。「非対格性症候群」は、他にも「VかけのN構文」「数量詞遊離構文」など、多数の統語現象に反映されるので、日本語にも適用することは間違いなかろう。しかし、同じ自動詞にもかかわらず、なぜD構造において違う統語構造をもつのか。この問題は、述語の意味を解明しないと分からぬ。次節より「語彙概念構造」を用いて、それを解明する。

4-1-2 語彙概念構造 (LCS)

影山（1996：47）によると、「語彙概念構造」（Lexical Conceptual Structure）

² 影山（1996：21）を参考にして書き直したものである。

とは、語彙の概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造のことである。

略して LCS という。その表記法は学者によって様々であるが、本稿では影山(1999)が提示したモデルをもとにする。氏は、すべての述語は「行為者 〈使役〉 → 対象物 〈変化〉 → 結果 〈状態〉」というビリヤードの連鎖のように分解できる。そして、その連鎖的事象を概念的に LCS に示すことが可能だと述べた。例えば、

(12) 暖かい = [ATATAKAI 状態]

(13) 暖まる = [[ATATAKAI 状態] + 変化]

(14) 暖める = [[[ATATAKAI 状態] + 変化] + 使役] 影山 (1999:62)

以上の三つの述語は、「ATATAKAI 状態」をもとに、順次に連鎖的事象を加えた結果である。(12) は「暖かい」という「状態」を示す。(13) は「暖かい」という「状態」になる「変化」を示す。(14) は「暖かい」という「状態」になる「変化」を起こす「使役」を示す。

影山 (1999:65) は、述語が担う連鎖的事象の段階に応じて、LCS の基本形を「状態」「変化」「活動」「使役」の四つに設定した。もともとは英語の例であったが、本稿との関連性を考えて、日本語に修正加筆して以下のようにまとめる。一行目は基本形のタイプとその LCS を表記し、二行目はそれに該当する実例と LCS を示す。以下は、影山 (1999:65) から引用したものである。

(15) 状態 : [y BE AT-z]

彼女は 東京に いる。 [彼女 BE AT-東京]

(16) 変化 : [BECOME [y BE AT-z]]

おもちゃが 壊れる。 [BECOME [おもちゃ BE AT-壊れる]]

(17) 活動 : [x ACT (ON y)]

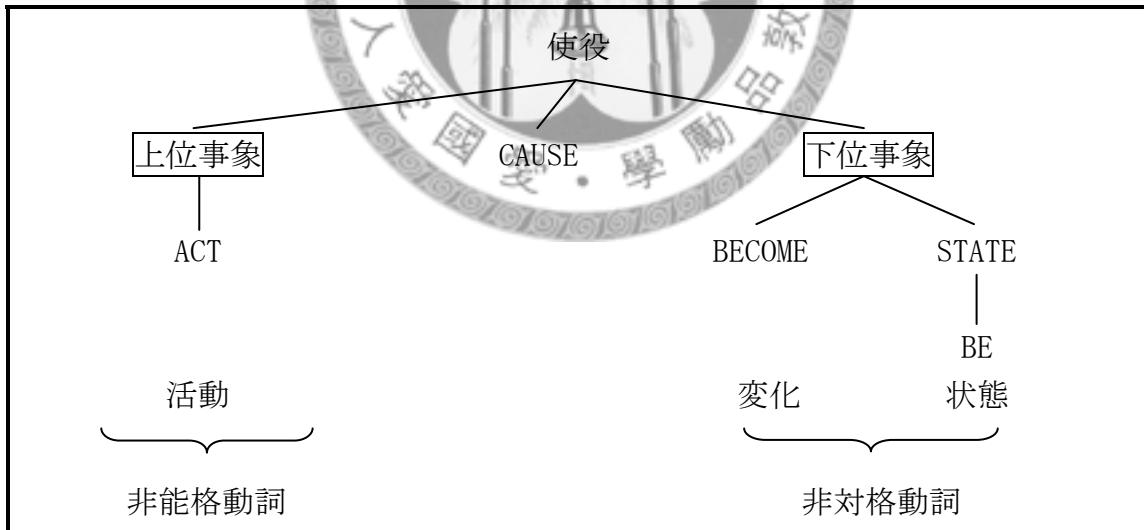
彼女は ボタンを 押す。 [彼女 ACT ON ボタン]

(18) 使役 : x CAUSE [BECOME [y BE AT-z]]

子供は 花瓶を 壊す。 子供 CAUSE [BECOME [花瓶 BE AT-壊れる]]

影山（1996：21）によると、「外項」は、意図的な動作・行為を行使する動作主や、生理的な活動の経験者である。一方「内項」は、自分の意志で動作するのではなく、自然に状態や位置が変化する対象者（物）である。上記の四つの基本型を見て分かるように、x は「外項」、y は「内項」に相当する。これで、前節の「非対格性の仮説」と本節の「語彙概念構造」が関連付けられた。両者における対応関係は、図 4-3 の「使役構造の雛形」に整理しておく³。

図 4-3 使役構造の雛形



本稿は、これらの理論の枠組みを借りて、能格性述語を分析する。第3章にも見たように、能格性述語は形容詞の場合が多い。本来、「非対格性の仮説」は

³ 影山（1996:90）から引用したものである。もともと使役を示す部分は CAUSE ではなく、CONTROL であったが、後の研究ではすべて CAUSE に統一したため、本稿もそれに従う。

主に動詞を対象にする説であるが、Tsujimura (1993)、Cinque (1996)、Bennis (2004) などでは、名詞や形容詞にも非対格的な性質を示すものがあると示唆されている。実際、「非対格性の仮説」を提出した Perlmutter (1978) も、「形容詞ないしそれに相当する状態動詞」は「非対格動詞」に属すると述べた。故に、形容詞を「非対格性の仮説」で説明するのは適切な考え方なのである。

日本にも、岸本 (2005) で、「非対格性の仮説」を日本語の形容詞に取り入れたという研究があるが、「欲しい」や「必要だ」などの少数の形容詞にしか検証を施さなかった。それに、氏は主に統語構造による検証テストを中心に考察を行ったため、LCS による意味領域に立ち入る試みは見当たらなかった。次節は、改めて「非対格性の仮説」を日本語に取り入れ、さらに「語彙概念構造」を用いて、能格性述語における「統語面」と「意味面」の関連性を捉える。

4-2 能格性述語の LCS による分類

影山 (1996: 139) によると、「内項」しかもたない「自動詞」は、「外項」が現れることによって、「他動詞」として用いることができる。これを「使役化」という。第3章で考察したように、能格構文の基本形は、もともと存在した物体（内項）に、人間（外項）が後から加わるという過程を経て成立した。この現象は「使役化」と共通性が見られる。本稿は、影山が提出した「使役化」という概念を能格構文に取り入れ、能格的文法現象を解釈する。本節は、まず LCS を通して、能格性述語における「使役化」を分析する。そのプロセスを通して、能格性述語がどのように統語構造と対応するのかを明らかにする。また、その結果に基づき、能格性述語の意味的な分類も施したい。

4-2-1 客観的用法（非対格述語）

前述の通り、能格構文の出発点は、「山が高い」「火事がこわい」といった、物事の状態を表す一項構文である。このような、物事の状態を表す構文の LCS として、影山（1996：50）は [y BE AT-z] と設定し、またその意味を「y は z という場所状態にある」と解釈した。ここでの z は「具体的な場所」も「抽象的な状態」も適用するため、以下の二例はどちらもこの LCS に属する。

(19) 彼女は 家に いる。 [彼女 BE AT-家]

(20) 彼女は 元気です。 [彼女 BE AT-元気]

(19) は「具体的な場所」の例で、(20) は「抽象的な状態」の例である。同じ要領で、第 3 章で考察した語彙を分析すると、以下のようになる。

(21) 山が 高い。 [山 BE AT-高い]

(22) 火事が こわい。 [火事 BE AT-こわい]

(21) は「山」が「高い」という「状態」にある、(22) は「火事」が「こわい」という「状態」にある、とそれぞれ解釈ができる。ここでは、y が意志をもたない「内項」に当たるため、全体は「非対格述語⁴」とも言える。

この類に属する述語には、「高い」「こわい」「悲しい」など、物事の属性を「客観的」に述べるものがある。いわゆる伝統の属性形容詞に当たる。「客観的」と

⁴ 「非対格性の仮説」では、主に動詞を扱うので、「非対格動詞」「非能格動詞」という用語が用いられた。本稿では、その仮説を形容詞にも適用するため、代わりに「非対格述語」「非能格述語」という用語を用いることにした。

いうのは、寺村（1992：11）によると、「誰にとっても」のことを意味している。例えば、(21) は、誰にとってもその山は「高い」という印象を喚起させ、(22) は、誰が火事を見ても「こわい」という気持ちが引き起こされる、と仮定しなければならない。だが、「客観的」はあくまでも相対的なものであり、その人が今まで生きた経験に強く依存している。人々は違う環境で育ち、生きた経験ももちろん違うため、百パーセント客観的なものは、存在しないと思われる。しかし、述語によって相対的に客観性が高いと見られるものもあるので、ほとんどの人間がそう思っていることを「客観的」と考えてよかろう。以下は、実例を挙げ、「客観的」とは何かを具体的に説明する。

(23) そこへ大勢の兵隊が攻めかけて来ましたが、梯子段が落ちているので登ることが出来ません。しかたなしに八方から鉄の塔を取り巻いて、ヒューヒューと矢を射かけましたが、あまり塔が高いのでみんな途中まで来て落ちてしまいました。（夢野久作『オシャベリ姫』）（下線筆者、以下同）

(23) では、兵隊が塔に向かって矢を射かけたが、その高さに届かず落ちてしまった。作者はそれを「塔が高い」と表現したが、「高い」といっても人々の経験によって認知が違う可能性がある。例えば、小さい頃から高層ビルが林立した都市に住む子供に比べ、一階建てしかない田舎に住む子供は「高さ」に対する認知も違ってくるはずである。その認知の違いにもかかわらず、ここで「塔が高い」と感じる理由は何だろう。それは多分、矢は人間が普通到達不可能の高さにまで届くことができる、という一般認識に由来すると考えられる。そんな矢の射程でさえ塔の高さには敵わない。そこから「高い」という判断が下されたのである。即ち、「矢の射程」を基準に、比較的に「高い」という客観的描写が出来たわけである。なお、この状況は、誰が見ても「高い」と判断するの

で、全人類にとって誰にでも当て嵌まる、客觀性が極めて高い表現である。

(24) 人間が人間を理解し合えぬほど、悲しいことはございません、人間が人間同士、理解し合えなければこそ、人間の団体が、おののおのその団体を理解することができないのでございます、さむらいがお百姓を理解することができないのが悲しいです、お百姓がさむらいを理解することのできないのも悲しいです…… (中里介山『大菩薩峠』)

(24)において、作者が表したいのは「人間が分り合えないのは悲しいこと」である。その具体例も挙げた。ここで言う「悲しい」の認定は、人によって微妙に違うが、一般の人にとっては通用すると思われる。なぜなら、もし人間が互いに理解し合えれば、いろいろな衝突が免れられるが、現実的にはそれが実現しにくい。このような状況に対して、ほとんどの人は「悲しい」と感じるのだろう。したがって、この文は全人類に共通する感情が反映されるため、「客觀性」があると認定してよからう。

(25) 「今日から先生がお前等と勉強することになった。先生はもう長いこと南洋で島民に教えとる。お前等のすることは何から何まで先生にはよう分つとる。先生の前でだけ大人しくして、先生のおらん所で怠けとつても、先生には直ぐ分るぞ。」一句一句ハッキリと句切り、怒鳴るような大声であった。「先生をごまかそうと思っても駄目だ。先生は怖いぞ。先生のいうことを良く守れ。いいか。分ったか？ 分った者は手を挙げよ！」凡《およ》そボロボロなシャツや簡単着をまとった数百の色の黒い男女生徒が、一斉に手を挙げた。 (中島敦『南島譚』)

(25)において、「先生がこわい」と判断された根拠は、「先生はもう長い間南洋で島民に教えたので、生徒が怠けをしてもすぐにはばれる」という描写によると考えられる。ここでの生徒たちはまだ子供なので、少し怠けてもおかしくない。しかし、こんな行為は先生の威圧の下で通用しない。その結果、先生には「こわい」という性質が生起したのである。この例では、「こわい」という認定は「数百の色の黒い男女生徒」の間にしか成立しないので、(23)に比べて少し「客観性」が落ちるが、やはり存在すると言えよう。ちなみに、ここでの「先生」は「ガ格」ではなく「ハ」によって標識された理由は、文脈上「先生」はすでに一回以上言及され、いわゆる旧情報に当たるので、「ハ」による「主題化」が働いたからである。故に、「ハ」で示されたにもかかわらず、「先生」という名詞句は統語構造において「内項」であることに変わりはない。

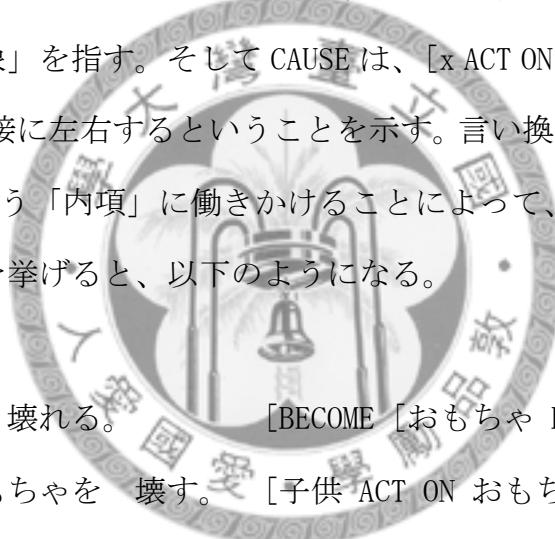
以上の分析で分かるように、「高い」は比較的に多くの人が共通の判断基準をもつので、どのような名詞句でも客観的解釈が成立する。しかし、「こわい」「悲しい」などの述語は文の生起環境によって、客観性が左右される可能性が高い。例えば、「戦争がこわい」は多分ほとんどの人に認められるが、「先生がこわい」という場合は、一部の学生においてのみ客観性が成立され、全人類の立場から見れば必ずしも客観性をもつわけではない。さらに、「虫がこわい」と言ったら、範囲はもっと狭くなり、主観に近いニュアンスになってくる。この場合は、「私は虫がこわい」のように、誰かが「外項」として言語化されるのが普通である。次節は、このような「外項」が言語化される現象を考察する。

4-2-2 外項の追加による使役化（非対格・使役化的述語）

能格構文の基本形では、最初に物体（内項）が存在し、それから人間がそれ

を認知し、感情を発した、と定義付けられる。ここでの人間は、意志性をもつものなので、LCSにおいて「外項」に相当する。そして、影山（1996：139）によると、「内項」しかもたない「自動詞」は、「外項」が現れることによって「他動詞」として用いることができる。これを「使役化」という。本稿の例は動詞ではないが、前述のように形容詞にも「非対格性の仮説」が適用できるので、「使役化」という概念を「能格性」の解釈に用いることにした。

影山（1996：87）によると、「使役化」を表す LCS の基本型は、 $[x \text{ ACT } ON y]$ CAUSE $[\text{BECOME } [y \text{ BE } AT-z]]$ と規定される。ACT は「働きかけ」の意味で、ON は働きかけの「対象」を指す。そして CAUSE は、 $[x \text{ ACT } ON y]$ が $[\text{BECOME } [y \text{ BE } AT-z]]$ の成立を直接に左右するということを示す。言い換えれば、 x という「外項」が入り、 y という「内項」に働きかけることによって、「使役化」が発生する。具体的に例文を挙げると、以下のようになる。



(26) おもちゃが 壊れる。 [BECOME [おもちゃ BE AT-壊れる]]
(27) 子供が おもちゃを 壊す。 [子供 ACT ON おもちゃ] CAUSE [BECOME
[おもちゃ BE AT-壊れる]]

(26) は、「おもちゃ」が「壊れる」状態になることを表しているが、「使役化」が発生した (27) は、「子供」の働きかけが「おもちゃが壊れる状態になる」ことを直接に左右すると解釈できる。この概念を形容詞に適用すると以下になる。

(28) 火事が こわい。 [火事 BE AT-こわい]
(29) 私は 火事が こわい。 [私 ACT ON 火事] CAUSE [火事 BE AT-こわい]

(26) (27) の動詞の場合は、状態変化（「壊れていない状態」から「壊れた状態」になる）が伴うため、BECOME が必要であるが、形容詞は状態変化ではなく、静止状態、即ち時間を超越した概念を表すので、BECOME が要らない。また、形容詞の場合は具体的な働きかけはないが、心から発した感情という抽象的働きかけがあるので、LCS は同じく ACT ON と表記できる。例文で示したように、(28) は「火事」が「こわい」という状態にあることを表しているが、(29) は「私」の心の働きかけが「火事がこわいという状態にある」ことを直接に左右する、と解釈することができる。ここで (28) (29) を (26) (27) と比較すれば、形容詞で起こる「使役化」は、「働きかけが述語の成立を左右する」という点において、動詞と共通点が見られる。なお、第3章では、「能格」の本質は「過程・行為の出発点」を明記することにあると述べたが、(29) の LCS における「働きかけ」を示す ACT ON は正に「過程・行為の出発点」という概念に対応する。

この類に属する述語は、「いい」「こわい」「嬉しい」「楽しい」などがある。主に感情に係わるものが多い。その理由は、前節の「非対格述語」に比べて、この類の述語はやや客観性が落ちるため、「誰かにとって」という言語情報を追加する必要があるからだ。ここでの「誰か」は言わば「外項」に当たるので、「外項」が加えることによって使役化が起こるとも言えよう。このように、もともと客観的用法の述語は、「外項」の追加によって、新たな主観的用法として使えるようになる現象を、本稿では「外項」による使役化という。そして、このようなプロセスを経て生まれた述語を「使役化的述語」と呼ぶ。以下は幾つか実例を挙げ、その現象を見る。

(30) その牧場のむこうは麦畑だった。その麦畑と麦畑の間を、小さな川が流れていた。よくそこへ釣りをしに行った。お前は私たちの後から、鯉竿

『もちざお』を肩にかついだ小さな弟と一緒に、魚籠『びく』をぶらさげて、ついてきた。私は蚯蚓『みみず』がこわいので、お前の兄たちにそれを釣針につけて貰『もら』った。 (堀辰雄『麦藁帽子』)

まず、(30) を検討しよう。作者は釣りのことについて語っている。釣りをするには、当然餌が必要だ。そこで主人公は蚯蚓を餌にしたが、昔の経験で蚯蚓への恐怖感を想起させたかもしれない。自分ではなく他の人につけてもらった。ここで、蚯蚓は当然「こわい」という性質をもっている。しかし、それは(25) のように、特定のグループに対するものではなく、主人公一人だけに所属する感情的反応である。したがって、「客觀性」が(25) ほど高くない。むしろ個人的な「主觀性」を抱いていると解釈した方が適切だと思われる。結論的に、この例においては、主人公個人の感情によって「こわい」という性質が成立するため、主人公による「使役化」と見なしてよかろう。

(31) 食物は酒を飲む人のように淡泊な物は私には食えない。私は濃厚な物がいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ。尤も此支那料理、西洋料理も或る食通と云う人のように、何屋の何で無くてはならぬと云う程に、味覚が発達しては居ない。幼稚な味覚で、油っこい物を好くと云う丈である。酒は飲まぬ。日本酒一杯位は美味しいと思うが、二三杯でもう飲めなくなる。(夏目漱石『文士の生活』)

個人感情に関するものその他に、好惡などの主觀的判断に係わる例もある。例えば、(31) がそれに当たる。この例は、食べ物の好みの話である。話し手にとって、濃厚な食べ物にしか興味がない。ここで、濃厚な物には「いい」という性質が存在すると想定してよかろう。しかし、それは「誰にとっても」ではな

く、話し手にしか感じられない「いい」性質なのだ。即ち、話し手の働きかけによって、濃厚な物に「いい」性質が成立するので、「使役化」と見なせる。

いったん整理すると、「使役化」のプロセスを以下に要約できる。まず、ある状態性質(zと設定する)の物体(yと設定する)が存在し、LCSとして[y BE AT-z]と表記する。それから、人(xと設定する)が新たな項として加わって、物体(y)に対して働きかけを行う。その結果、述語には「自動的」から「他動的」へと移行する変化が起きる。この場合、いわゆる使役化(CAUSE)が発生し、LCSでは[x ACT ON y] CAUSE [y BE AT-z]になる。また、述語全体の意味も使役化とともに、客観から主観へと変化する現象が見られるのである。

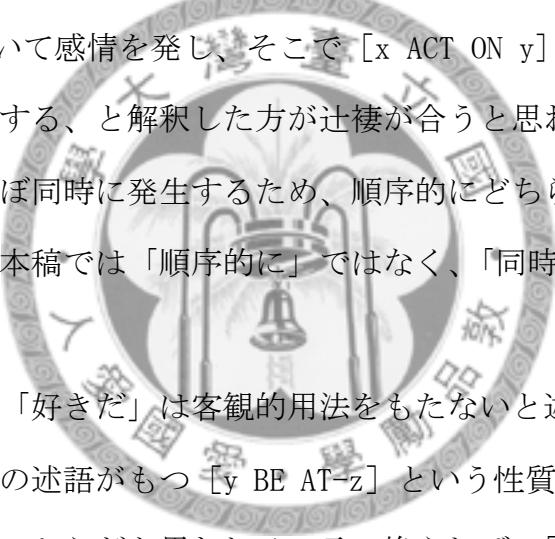
4-2-3 主観的用法(使役化的述語)

以上のことから分かったように、まずyがあって、xが後に入るパターンが理想的な能格構文の基本形であるが、最初からyが存在しないように見える状況もある。例えば、以下の例を見よう。

- (32) お金が 欲しい。 [お金 BE AT-欲しい]
- (33) 私は お金が 欲しい。 [私 ACT ON お金] CAUSE [お金 BE AT-欲しい]
- (34) 彼女が 好きだ。 [彼女 BE AT-好きだ]
- (35) 私は 彼女が 好きだ。 [私 ACT ON 彼女] CAUSE [彼女 BE AT-好きだ]

(32) (34) を装定表現にすれば「欲しいお金」「好きな彼女」のように、意味的に不安定になるため、必ず「私が欲しいお金」「私が好きな彼女」にして、「誰かが」を補わなければならない。これは、「欲しい」「好きだ」などの述語は、

主觀性が強すぎて、客觀的用法として用いられにくいことに由来する。單純な客觀的用法をもたないため、LCS を $[y \text{ BE } AT-z]$ と設定できない。しかし、それは x が先にあって、 y が後から入ったわけではない。なぜなら、「欲しい」「好きだ」などの述語は、いずれも特定の対象がないと成立しないからだ。例えば、「欲しい」という気持ちを発したときは、必ず何かのものには潜在的に「それを手に入れたい！」と思わせる性質が存在する。我々はその潜在的性質に気付いてはじめて、「欲しい」という気持ちを喚起させたのだ。決して何も理由もなく、ただ漠然とした「欲しい」気持ちを発したわけがない。故に、客觀的用法がないとはいえ、やはり理論的には、先に物に $[y \text{ BE } AT-z]$ という性質があつて、 x がそれに気付いて感情を発し、そこで $[x \text{ ACT } ON \ y] \text{ CAUSE } [y \text{ BE } AT-z]$ という使役化が発生する、と解釈した方が辯證が合うと思われる。ただ、この二つのプロセスはほぼ同時に発生するため、順序的にどちらが先なのか気付きがたい。そのため、本稿では「順序的に」ではなく、「同時に」と解釈した。



先ほど、「欲しい」「好きだ」は客觀的用法をもたないと述べたが、その具体的な理由は、この類の述語がもつ $[y \text{ BE } AT-z]$ という性質は、人間の心を個別に反映することが多いからだと思われる。言い換えれば、「何かが欲しい」という気持ちは、人々によって違うので、かなり主觀的な性質である。前節で論じた述語は、主觀性という要素において本節の「欲しい」などの述語と同じであるが、前に来る名詞句によって主觀性がそれほど強く感じない場合がある。例えば、「こわい」「悲しい」などの述語は、文全体の生起環境によって、ある程度一部の人間に共通する価値観を表わすことが可能であるが、本節の「欲しい」「好きだ」などの述語は個人差が大きすぎて、一部の人間においての共通性も成立しにくい。以下は、この類に属する述語を実例を通して観察しよう。

(36) 「藤尾さん、僕は時計が欲しいために、こんな酔興な邪魔をしたんじゃない。小野さん、僕は人の思をかけた女が欲しいから、こんな悪戯をしたんじゃない。こう壊してしまえば僕の精神は君らに分るだろう。これも第一義の活動の一部分だ。なあ甲野さん」 (夏目漱石『虞美人草』)

(36) では、話し手は「人の思をかけた女」を欲しがっている。とはいえ、わけもなく女が欲しいのではない。話し手は、まず頭の中に特定の女性像を想定していると考えられる。しかも、その女性は話し手にとって、「欲しい」と思わせる特質が存在しなければならない。ただ、「欲しい」と思わせるという性質は、その女性に潜在的に存在するだけで、話し手がそれに気付いてはじめて具現化される。そのため、「欲しい」という述語には客観的用法として用いられて、主観的用法のみ存在する。

(37) 「月人は、月の表面に、たくさんの出入口を作っている。そこから中へはいりこむと、もちろんそれはトンネルのようになっているんだが、斜《なな》めに掘ってある。左右は階段になっているが、まん中はよく滑《すべ》るように、磨《みが》いた岩石の舗道《はどう》になっている。つまり、これが子供の遊び場にある『おすべり』と同じ作用をするのだ。滑《すべ》って、早く下へ行けるように考えてあるのじや。月人は、なかなか工夫をするのが上手だ」 (海野十三『三十年後の世界』)

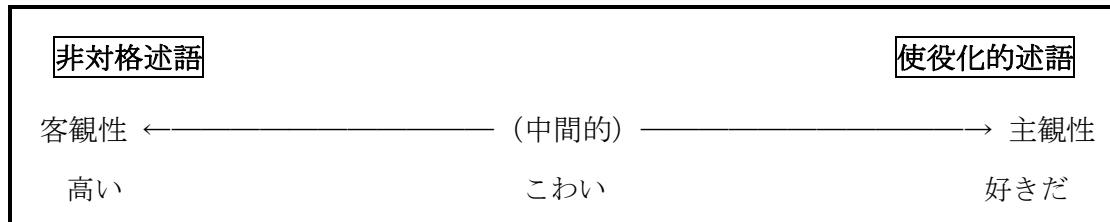
(37) も同じである。月人は「工夫すること」が上手だ。これも客観的用法として使えない。なぜなら「工夫すること」はすべての人にとって、「上手だ」という結果にはならないからだ。だが、これは「工夫すること」には「上手だ」という性質存在しないのではなく、ただ潜在的に潜んだだけである。つまり、

月人にとって「工夫すること」は潜在的に「うまくできる」性質をもっているのだ。そして、月人の存在によってその性質がはじめて具現化され、言語として表現されたのである。

以上の説明により、「欲しい」「上手だ」などの述語を能格構文の基本形に当て嵌めることができとなる。ただ、客観性不足という理由で、「使役化的述語」用法しかもっておらず、「非対格述語」としては用いられない。しかし、それでもこれらが能格性述語であることに変わりはない。

ここまででは、客観性と主観性の要素を基準に、能格性述語の分類をした。その要約を以下に述べる。即ち、客観的用法の述語は「内項」しか要求しないので、「非対格述語」として分類できる。そして、主観的用法に行くほど、本来存在した「内項」の他に、「外項」が「過程・行為の出発点」として求められるようになり、「使役化的述語」として分類される。言い換えれば、主観性の度合いによって、能格性述語を図4-4のようにグループ分けすることができる。

図4-4 主観性の度合いによる能格性述語の分類



上図では、「客観性」が最も高い述語「高い」は、統語的に対応しているのは「非対格述語」である。一方、「主観性」が最も高い述語「好きだ」は、統語的に「使役化的述語」と対応している。そして、「客観性」と「主観性」の中間に位置する述語「こわい」は、「非対格述語」でも「使役化的述語」でも用いられるため、

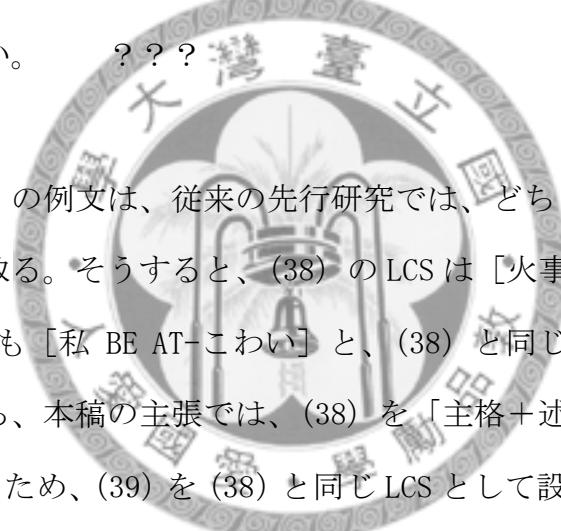
統語的には二種類の振る舞いを示している。

4-2-4 内項の背景化（非能格述語）

前節までは、主観性の度合いを基準に能格性述語の分類を施したが、本節はそれぞれの能格性述語における「内項の背景化」について論じる。これは非常に重要なポイントである。本章の冒頭にも述べたように、

(38) 火事が こわい。 [火事 BE AT-こわい]

(39) 私は こわい。 ???



例えば、(38) (39) の例文は、従来の先行研究では、どちらも「主格+述語」という統語構造を取る。そうすると、(38) の LCS は [火事 BE AT-こわい] になり、(39) の LCS も [私 BE AT-こわい] と、(38) と同じパターンになってしまふ。しかしながら、本稿の主張では、(38) を「主格+述語」、(39) を「能格+述語」として扱うため、(39) を (38) と同じ LCS として設定してはならない。その根拠として、まず (38) (39) の名詞句「火事」と「私」は、それぞれ違う統語環境より生起されたことを証明する必要がある。以下、(38) の名詞句「火事」は「内項」で、(39) の名詞句「私」は「外項」であることを論述する。

(40) 私は 火事が こわい。 [私 ACT ON 火事] CAUSE [火事 BE AT-こわい]

本章の分析では、(38) は客観的用法の「非対格述語」である。そして、「外項」による「使役化」が発生すると (40) のように、主観的用法の「使役化的述語」になる。ここまで前節の分析であるが、さらに分析を進めることができます。

きる。例えば、もし y が「特定できない」、あるいは「前後の文脈によって暗示される」場合、 y が意識から背景化されることがある。その場合、 x の内部にある心の働きだけが残り、LCS では $[x \text{ ACT}]$ になる。

まず、「 y が特定できない場合」とは何かを説明する。本節に属する述語は、これまで言及したものと違って、 y である「内項」は「具体的なもの」を要求することが少なく、代わりにほとんど「抽象的な物事」である。そして、「抽象的な物事」になると、「背景化」が発生する可能性が高くなる。前節まで分析した述語は、対象として「具体的なもの」を要求することがほとんどなので、必ず特定のものを「内項」として取らなければならない。即ち、わけもなく感情が発するはずがない。ところが、例えば「嬉しい」「悲しい」などの述語は、対象として「抽象的な物事」を要求することが多いため、非特定の対象を設定することが可能となる。以下、実例を挙げて、この現象を説明する。

(41) 「もうどうしても二十二、三、学校に通っているのではなし……それは毎朝逢わぬのでもわかるが、それにしてもどこへ行くのだろう」と思ったが、その思ったのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい着物の色彩が言い知らず胸をそそる。「もう嫁に行くんだろう？」と続いて思ったが、今度はそれがなんだか侘しいような惜しいような気がして、「己も今少し若ければ……」と二の矢を継いでたが、「なんだばかばかしい、己は幾歳だ、女房もあれば子供もある」と思い返した。思い返したが、なんとなく悲しい、なんとなく嬉しい。 (田山花袋『少女病』)

例えば、(41)において、なぜ「悲しい」「嬉しい」かといつても、話し手も「なんとなく」としか伝えなくて、理由は言葉ではうまく表せない漠然とした

ものである。その結果、「対象」が背景化し、言語表層から消去され、最終的に $[x \text{ ACT}]$ だけが残るわけである。これは、「悲しい」「嬉しい」などの述語は「抽象的な物事」を対象としたことが多いので、この例文のように抽象しすぎた場合は「特定できないもの」となり、背景化されてしまうからである。

次に、「 y が前後の文脈によって暗示される場合」とは何かを説明する。先にも述べたが、本節に属する述語は、対象として「抽象的な物事」を要求することが多い。そして、一瞬の感情を表すことも多いので、特に、話し手がその場で感じる状況をもとに発した感情がほとんどである。そのため、もし前後の文脈から、その人がなぜそのような感情を発するのかを推測できる場合、 y は対象として明示されることなく、背景化されてしまう。実例を挙げて説明しよう。

(42) 「きょうは吉左衛門さんにお目にかかるて、わたしもうれしい。妻籠でも収穫《とりいれ》が済んで、みんな、一息ついてるところですよ。」との言葉をお民のところへ残して行った。 (島崎藤村『夜明け前』)

(42) では、話し手は「わたしもうれしい」と表現しただけで、対象を取らなかつたが、実は前後の文脈からその「対象」を知ることができる。この例文の場合、「うれしい」という感情は「吉左衛門に会った」ことに由来すると考えられる。文脈によってすでに暗示されたので、対象として言語化される必要がない。その結果、対象が背景化され、「内項」は表面上明示されないことになる。

(43) 父に死なれて、私は初めて此の世に歓喜に通ずる悲しみというものも在り得ることを知った。本当に私は悲しい。しかし、その悲しきはいかにも広々としており透明で、何とも云えぬ明るさ温さに照りはえている。

その悲しみがそんなだから、その悲しさではどう取乱すことも出来ず、
またどう心を傷つけ歪めることも出来ない。 (宮本百合子『わが父』)

(43) も同じ現象を示している。話し手は「私は悲しい」としか言わなかつたが、前後の文脈から推測すると、その原因是「父が亡くなったこと」にあると考えられる。すでに文脈によって暗示された以上、言語化される必要がなく、最終的に、「y が特定できない場合」と同じく、「対象」が背景化し、言語表層から消去され、LCS 表記においては [x ACT] だけが残るわけである。

(44) 私は こわい。 [私 ACT]

分析の結果、(39) の LCS は (44) のように設定できる。結論として、本稿では (38) と (39) が違う統語構造を取る主張も、LCS を通して実証された。(38) は客観的用法の「非対格述語」で、統語構造は「主格+述語」である。一方、(39) は使役化による結果を背景化した「非能格性述語」で、統語構造は「能格+述語」である。その枝分かれ構造における相違点は、図 4-5 に示しておく。

図 4-5 非能格述語と非対格述語の構造比較

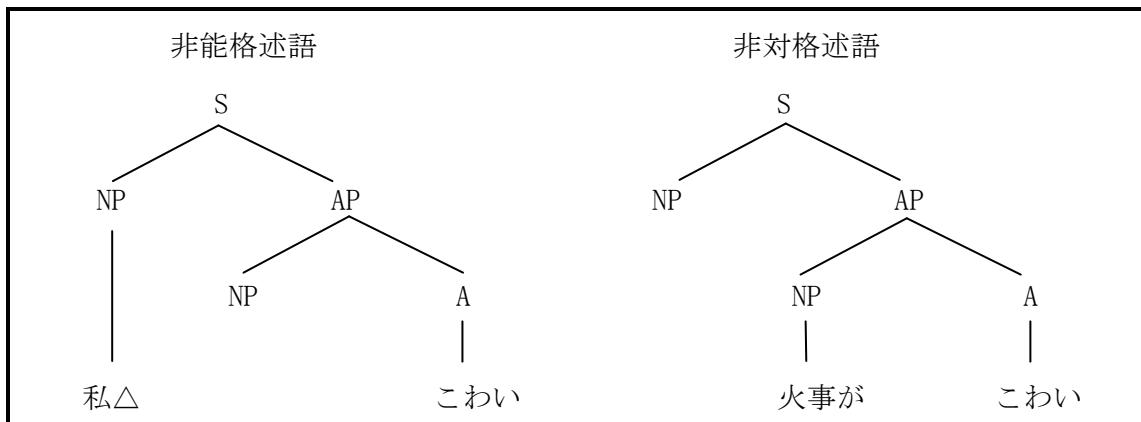


図 4-5 により、「私」と「火事」は (38) と (44) において、それぞれ「外項」と「内項」に位置することが確認された。これで、(38) (44) は、違う統語環境より生起されたことを証明できると考えられよう。

4-3 まとめ

本章は、「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」という生成文法の理論から始まり、まず「非対格性の仮説」で提示された「外項」「内項」の概念を能格構文に取り入れ、さらにそれを LCS とリンクさせた。その結果、能格構文の基本形と LCS の対応関係を得ることができた。以下の表 4-2 に示しておく。

表 4-2 能格構文の基本形と LCS の対応関係

$x \triangle$	$y ガ$	z	$[x \text{ ACT-ON } y] \text{ CAUSE } [y \text{ BE AT-}z]$
↑ 外項	↑ 内項	↑ 外項	↑ 内項

上表によると、客観的用法の唯一の項である「内項」は「外項」が現れることで「使役化」が発生し、主観的用法へと変わるというプロセスが、LCS によって反映された。これは第 3 章の結論、能格構文の発生過程とうまく合致している。

次に、本章は LCS を通して、能格構文における「統語レベル」と「意味レベル」を関連付けさせた。結論として、同じ能格性述語にもかかわらず、その意味特徴によって、「外項」と「内項」の現れ方が変わり、統語構造に反映されることが分かった。本章の考察を通して得られた能格性述語の分類要素とその語例を下の表 4-3 にまとめた。

表 4-3 能格性述語の LCS による分類

語例	LCS	述語類型
客観 ↓ こわい	[y BE AT-z] [y BE AT-z] [x ACT ON y] CAUSE [y BE AT-z]	非対格述語 非対格述語 使役化的述語
主観 内項背景化 嬉しい	[x ACT ON y] CAUSE [y BE AT-z] [x ACT]	使役化的述語 非能格述語

表 4-3において、「内項」しかない「非対格述語」が「外項」の追加による「使役化」を通して「使役化的述語」へと派生するというプロセスが観察できる。この二種類の述語を区別する決定的な要素は「主観性の度合い」にある。要するに、「客観的用法」（「高い」など）であれば「非対格述語」となり、「主観的用法」（「好きだ」など）であれば「使役化的述語」となる。そして、「客観的用法」としても「主観的用法」としても用いられる、言わば、両者の中間に位置するもの（「こわい」など）は、「非対格述語」と「使役化的述語」の二種類の統語構造をもっている。さらに、上記における一部の「使役化的述語」（例えば「嬉しい」など）は「内項」を「背景化」させることによって、「非能格述語」へと派生することもできる。まとめとして、能格性述語はまず「主観性の度合い」に応じて、三グループ（各グループの代表的な語例は、それぞれ「高い」「こわい」「好きだ」である）に分けることができる。そして、もしそれらの述語に「内項背景化」が発生する場合、「内項」はさらに言語表層から消去される現象が起きる（例えば「嬉しい」など）。ちなみに、能格性述語が以上の分類要素に応じて反映された統語構造のパターンは、「非対格述語」「使役化的述語」「非能格述語」の三通りである。

上述のように、いわゆる能格性述語は、語彙のもつ意味内容によって統語構造は様々であるが、全部能格構文の基本形を出発点とし、そこから派生したものと見なしてよからう。以下は、本稿で観察できる能格性述語を、統語構造のパターンに従い、表 4-4 に整理する。二種類以上の用法として使える述語もあるので、同一語が同時に二つの分類に跨ることも可能である。

表 4-4 能格性述語の整理

述語類型	語例
非対格述語	いい、こわい、嬉しい、悲しい、楽しい、寂しい、懐かしい、おかしい、ある、いる、必要
使役化的述語	いい、こわい、嬉しい、悲しい、楽しい、寂しい、懐かしい、おかしい、好き、嫌い、上手、下手、得意、苦手、分かる、見える、聞こえる、できる、欲しい、ある、いる、要る、必要
非能格述語	こわい、嬉しい、悲しい、楽しい、寂しい、懐かしい、おかしい

上表を見て、「使役化的述語」として使える語数が最も多いことが窺える。その理由は、能格性述語はもともと話し手の主観による「使役化」の働きによって発生するためだと思われる。なお、表 4-4 に挙げた「能格性述語の LCS 一覧」に関しては、付録を参照されたい。

最後に、本章最初に挙げた問題を振り返って、この章を終わりにしよう。まず、同じ能格性述語にもかかわらず、違う統語構造のパターンを取る問題であるが、本稿では LCS を導入して説明を試みた。その結果、能格性述語の取る統語構造がその述語の意味特徴に依存することが明らかになった。結論として言

えるのは、それぞれの能格性述語は違う統語構造を取るとしても、能格構文の基本形を出発点から派生する点においては共通していることである。

以上、本章では「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」という理論の枠組みを取り入れ、能格構文の基本形における「統語レベル」と「意味レベル」をリンクさせる試みをした。さらに、LCSに基づき、能格性述語の分類も施した。次章は、日本語における「能格構文」と「対格構文」の違いについて考察する。





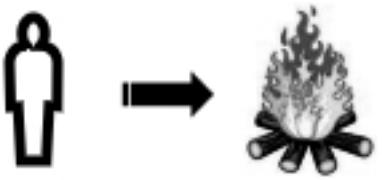
第5章 日本語における能格構文の位置付け

ここまで流れを振り返ってみよう。第3章では、能格構文の基本形を設定した。第4章では、能格性述語はどのように能格構文の基本形と対応するのかについて、「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」などの理論を通して考察した。しかし、能格構文は果たして対格構文とどのように違うのか。また、日本語において、能格構文はなぜ存在するのだろうか。これらの問題は、本章の議論で明らかにする。他には、能格構文の理論を現在の日本語文法体系に導入して、どのようなメリットがあるのか、または、これまでの文法理論にはどのような問題点が存在するのか、などのような疑問も、第5章において述べていく。

5-1 日本語における能格構文と対格構文

第3章で考察したように、能格構文の基本形は、ある性質をもつ「内項」がまず存在し、それから「外項」が入り、その性質を認知して、感情による「使役化」が発生することを通して成立した。その基本形を、図5-1に示しておく。

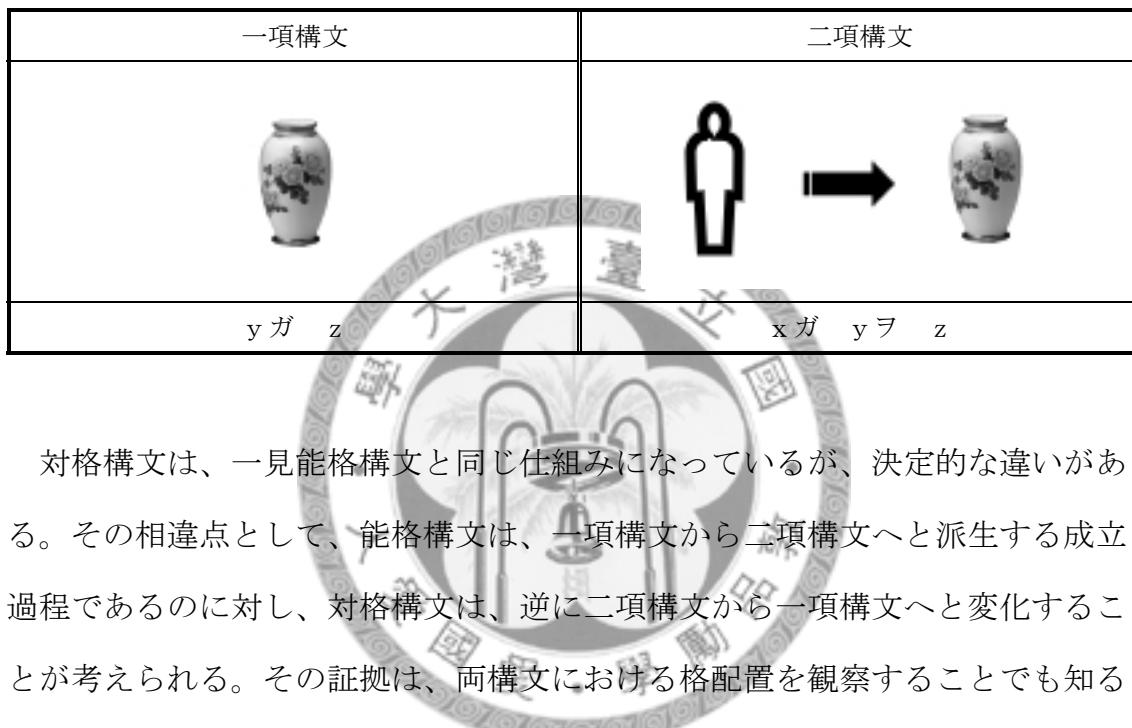
図5-1 能格構文の基本形と統語構造

一項構文	二項構文
	
y ガ z	x △ y ガ z

上図によると、「使役化」が発生する前に、統語構造は「y ガ z」と規定され、

唯一の項である「内項」は「ガ格=主格」で標識される。そして、「使役化」が発生したあと、統語構造は「 $x \triangle y \text{ ガ } z$ 」となり、「内項」は依然として「ガ格=主格」で標識されるが、新たに入った「外項」は「△格=能格」によってマークされる。それに対し、対格構文の基本形は、図 5-2 のように考えられる。

図 5-2 対格構文の基本形と統語構造



対格構文は、一見能格構文と同じ仕組みになっているが、決定的な違いがある。その相違点として、能格構文は、一項構文から二項構文へと派生する成立過程であるのに対し、対格構文は、逆に二項構文から一項構文へと変化するこことが考えられる。その証拠は、両構文における格配置を観察することでも知ることができる。まず、能格構文と対格構文の例文を検討してみよう。

- (1) 火事が こわい。
- (2) 私△ 火事が こわい。
- (3) 花瓶が 割れる。
- (4) 私が 花瓶を 割る。

例えば、能格構文では、(2) の「使役化的述語」は (1) の「非対格述語」が「使役化」して生成した結果と見られる。その理由は、「火事」は (1) も (2)

も「ガ格」によって示すので、(2) は (1) をもとに何かを加えた印象が強いからである。格標識を観察したこの結論は、第 3 章で考察した能格構文の発生過程（一項構文から二項構文へ）と一致している。

しかし、対格構文では、(3) (4) における「火事」はそれぞれ違う格標識によってマークされるため、対格構文のように (4) は (3) から来たとは言いがたい。むしろ、先に (4) があって、(3) は後に生起されたと考えた方が自然である。なぜなら、物事の成立順序において、まず「私が花瓶を割る」という行為が発生してから、「花瓶が割れる」という結果が成立したからである。

それでは、このような派生順序の違いは果たしてどこから来るのか。本稿の考えにより、主観性と客観性の問題に係わると考えられる。この点について、本稿では以下のように仮定する。能格構文は、主観性をもつ構文である。それに対し、対格構文は客観性をもつ構文である。次節より、能格構文と対格構文を別々に考察し、その仮定を実証してみる。

5-1-1 主観性をもつ能格構文

もう一度図 5-1 を見る。能格構文において、一項構文でも二項構文でも、「ガ格」によって標識されたのは「内項」である。これは、話し手がどちらの構文に対しても、「内項」を同じ意識をもって認知することを意味している。一項構文では、「内項」は唯一の項なので「ガ格」をそこに置くのは考えられるが、二項構文でも、「ガ格」を「内項」に置くのはなぜだろうか。一般的に、「ガ格」は最も認知されやすいもの、いわゆる「主役」を標識する。名詞句階層によると、上位に立つ名詞句ほど活動性が高いので、先に認知される可能性も順番的

に他のものより高い。そこで、能格構文の「外項」は感情を発する人間であるため、当然「内項」より活動性が高い。それにもかかわらず、日本人は「外項」よりも、「ガ格」を活動性の低い「内項」に置く理由は一体何だろうか。

ここで、もう一度能格構文の発生過程を振り返ってみよう。前章の考察では、能格構文は主觀性による使役化を経てはじめて成立すると分かった。そこで、主觀性は主觀に依存する性質なので、もちろんその事件を実際に体験した当事者でないと判断できない。つまり、認知のルートは当事者を通さないと主觀性が成立しない。故に、当然のことながら、能格構文の発話時の視点は、当事者自分自身に置かれることになる。視点を自分に置くために、「外項=自分」はもちろん視野には入らない。その結果、視野内にあるのは「内項」だけとなり、「ガ格」でその唯一の項を標識するのも大変合理的である。図5-3は、能格構文が構築されるときの視点をイメージしたものである。

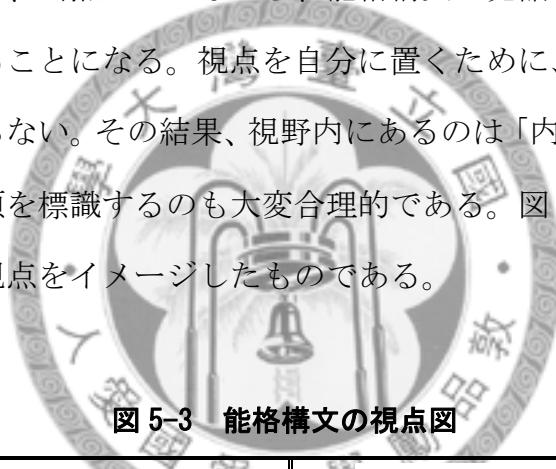
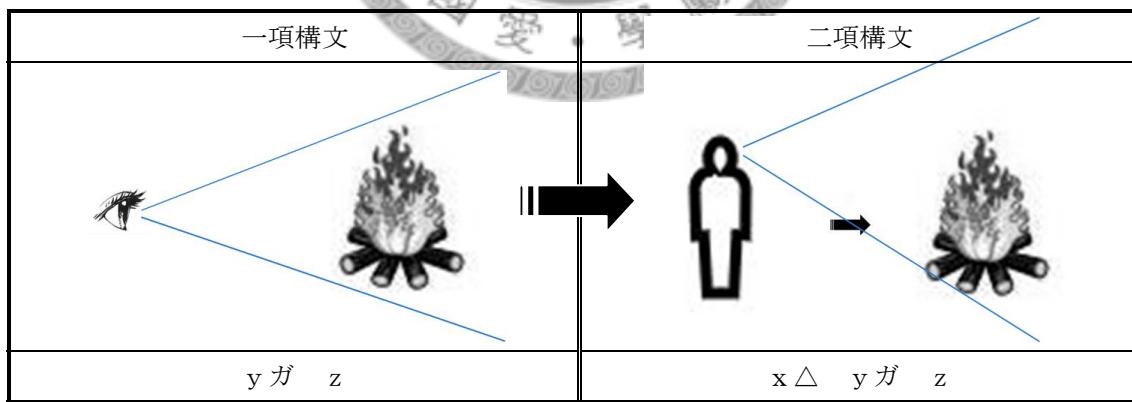


図5-3 能格構文の視点図

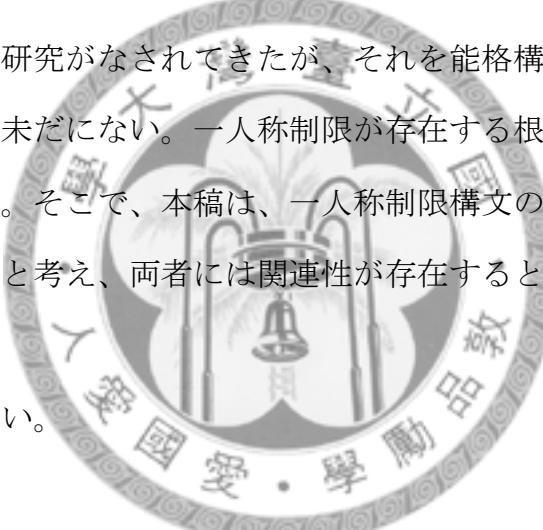


上図で示したように、能格構文の発生過程において、二項構文は一項構文をもとに派生されたと見られる。そして、一項構文から二項構文へと変化するプロセスには主觀性が伴うゆえ、視点が話し手自身に置かれることになる。そこで、当然ながら視野に入るのも「内項」しかない。ここで、特に注目すべきな

のは二項構文のところである。二項構文は、空間的に「外項」と「内項」が両方とも存在するが、話し手の視点が「自分=外項」に置かれたため、当然「自分=外項」は話し手の目には映らない。そこで、まず「ガ格」をもって視野内の「内項」を標識し、それから、視野外の「外項」を「行為・過程の出発点」を明示する「能格」でマークすると考えられる。

日本語の能格構文は、視点を話し手自分に置く証拠として、一人称制限構文という現象が挙げられる。日本語には、一人称制限構文が存在することは周知の通りである。これまでも、西尾 (1972)、寺村 (1982)、金水 (1989)、益岡 (1997)などの学者によって研究がなされてきたが、それを能格構文に関連付けようとする研究は管見では未だにない。一人称制限が存在する根本的な理由も、完全に解明されていない。そこで、本稿は、一人称制限構文の原因是主観性をもつ能格構文に由来すると考え、両者には関連性が存在すると主張したい。

(5) 火事が こわい。



例えば、(5)において、話し手が発話したときの視野は、目の前にある「火事」だけだと考えられる。なぜかというと、文の中で具現化された名詞句はそれしかないからだ。そこで、視野内に入ったのは「火事」しかないので、それが話し手にとっていちばん認知しやすいものとなる。したがって、話し手は「ガ格」を使って、その唯一の項をマークしたと考えられる。

(6) 私は 火事が こわい。

(7) *彼は 火事が こわい。

そして、(6)において、「私」という新たな名詞句が入ったため、名詞句が二つに増えたが、話し手の視野内にあるものは、やはり(5)と同じ「火事」だけだと思われる。その証拠は、「火事」は(5)(6)とも同じ「ガ格」という格標識でマークされることの他に、もう一つある。それは、「外項」が一人称の(6)は、正しい文として成立するのに対し、「外項」が三人称の(7)は、非文になってしまうということである。

非文になる原因是、能格構文を成立させるための「使役化」というプロセスは、当事者自分を通さないと成立しないからだと思われる。即ち、(6)の認知ルートは、まず話し手が「火事」というものを目に入映し、それを認知してから自分の心から感情を発したので、「使役化」は話し手自身を通じてはじめて成立する。ところが、(7)の場合、話し手は当事者ではないため、「使役化」の過程は、話し手自身を通していない。第3章で、能格構文のプロセスは、客観から主観への変化だということを述べた。即ち、能格構文の成立は、主観性による使役化がいちばん大切な発生条件である。ただ、主観性の認定は人によってかなり異なるので、原則的にその当事者でないと分かるはずがない。つまり、話し手が「火事」を目に入映したとしても、別の人気が感情を発したかどうかは、その別の人にはしか分からない。そのため、能格構文は「外項」が一人称の場合のみ成立することが多い。これで、能格構文は視点を話し手自身に置く主観性をもつ構文であることは、裏付けられたと考えられる。

能格構文の視点が一人称に置かれる、そのもう一つの証拠は、「外項」が一人称のときは、よく省略されることである。日本語の省略現象について、池上(2007)は、次のように述べている。(下線筆者)

発話の際、話し手にとっては自分自身の存在は当然の前提であるから、自分自身は言語化して提示する対象の範囲に含めなくてすますことに対する許容度が潜在的に高い——とりわけ、言語化する状況を話し手が〈外〉から観察し、報告する〈客観的〉な認識者の立場から捉えるのではなく、問題となる状況の〈内〉に身を置いて、自らがそれに関与し、経験している〈主観的〉な認識者として捉えるという場合は、認識の原点としての自分自身は言語化の対象としては意識されないまま、いわば〈無化〉され、〈ゼロ〉として表示される——

以上の引用によれば、人間は自分自身を認識の原点とする場合は、言語化されることなく、ゼロとして表示される。この論点は、本稿で主張する「能格構文は視点を自分に置くため、一人称で発話をする際は、外項がよく省略される」とは関連性が見られる。しかし、池上はその論点を主観性の説明に用いただけで、能格構文との関連性は述べていない。以下は、池上の説をさらに進めて、能格構文における「一人称主語省略」という現象を見る。

(8) 火事が こわい。

例えば、自然な日本語発話において、(6) は十分な前後文脈が与えられているという前提で、(8) のように「外項」である「私」が省略されることが多い。そして、池上の引用にも述べた通り、これは話し手が発話の視点を自分に置いたので、わざわざ自分を明示する必要がないためだと思われる。以上を踏まえて、池上の説を本稿の能格構文に適用しても通用できよう。これを用いて、能格構文における「一人称省略現象」も裏付けられるのであろう。

以上、「一人称制限構文」と「一人称省略現象」という二つの理由をもとに、能格構文は視点を話し手自身に置く構文として考えることが可能である。したがって、本稿は、能格構文は主觀性をもつ構文と主張したい。

5-1-2 能格構文における擬似一人称

前章では、能格構文は主觀的立場で物事を描写するので、「外項」は一人称を取ると述べた。しかし、よく観察すると、一人称から物事を捉える能格構文でも、「外項」としては三人称を取る構文があることに気付いた。

(9) 太郎は 花子が 好きだ。

(10) 山田は 日本語が 上手だ。

例えば、(9) (10) はどちらも能格構文であるが、「外項」は三人称が該当する。このような現象を、本稿は「擬似一人称」という。つまり、あたかも自分がその人のように、擬似一人称の立場で発話をするという考え方である。

なぜこのようなことが可能なのか。もう一度観察すると (9) (10) の述語は、「こわい」「悲しい」などとは性質が違うことが分かるはずである。「こわい」「悲しい」は、瞬間的な感情あるいは反応しか見せない述語である。それに対し、「好きだ」「上手だ」は、長期間続く状態、または外見から容易に観察できる状態である。したがって、「こわい」「悲しい」は話し手の感情しか表せないのは、その気持ちが分かるのは話し手しかいないからだ。(9) (10) の場合、「好きだ」「上手だ」は長期間続いたり、外から観察できる状態なので、他の人はその人を観察することで彼の感情を知ることが可能である。そのため、本人でなくても、

他の人があたかも本人の立場に立って一人称的に発話することができる。しかし、厳密に言えば、本当の一人称とは言えないため、本稿はそれを「擬似一人称」という。以下は、この論点を例を通して裏付けよう。

- (11) 山田は 幽霊が 見える。
- (12) [?]山田は 富士山が 見える。

例えば、(11) はいかなる状況においても成立できる。その理由は、我々は山田が普段の振る舞いから観察して、あるいは本人の言い張りによって、「幽霊が見える」という判断を山田本人という擬似一人称を通して下すことができるからである。言い換えれば、「幽霊が見える」ことは、「長期間継続可能な状態」として捉えることができる。ところが、(12) を成立させるためには、山田が話し手の可視範囲にいなければならない。なぜなら、「富士山が見える」という事実は「一瞬の出来事」として解釈されるからだ。その「一瞬の出来事」は、普段山田の振る舞いを観察しても分かるわけがない。その結果、当然話し手は「擬似一人称」を取ることが不可能である。このように、「長期間継続可能な状態」も「一瞬の出来事」も表せる述語は、三人称の構文においては状況に応じて制限が生じことがある。

「擬似一人称」が観察できる現象として、もう一例挙げよう。以下の例文は、寺村（1984：351）によるものである。

- (13) *太郎は 水が 欲しい。
- (14) 太郎は 水が 欲しかった。

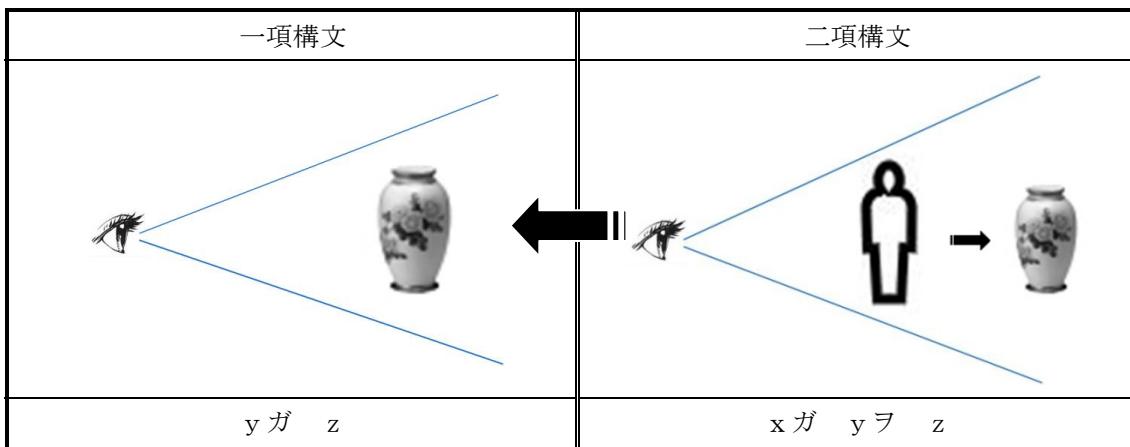
(13)において、「欲しい」は主観性をもつ能格構文を成す述語であるため、「外項」として一人称が来るよう限定されている。しかも、述語「欲しい」は「一瞬の出来事」を表わすので、外見から感情を観察することができない。もちろん、「擬似一人称」を取ることも不可能である。したがって、(13)のように、「外項」として三人称が来ると非文となる。ただし、寺村（前掲）は、こうした述語が（14）のように「タ形」になることで、人称制限が解除されると述べた。つまり、「欲しい」のような「一瞬の出来事」を表わす述語は、その場ではすぐに当事者の感情を観察できないが、「タ形」になるとその「一瞬の出来事」も発生済みとなつたため、その当事者の感情を把握する時間的な余裕が出てくる。故に、「擬似一人称」を取ることが可能となる。例えば、(14)は、別の人があたかも過去にある太郎の立場に立って物事を描写するように見える。

以上のような二つの現象を根拠として、本稿は「擬似一人称」の存在を主張する。これで、なぜ「太郎は花子が好きだ」といった能格構文は「外項」として三人称も許されるのかを説明できる。

5-1-3 客観性をもつ対格構文

これまで、能格構文は主観性をもつことについて述べてきた。それに対し、対格言語の場合は、客観性をもつ構文と本稿が仮定している。その理由は、対格構文は能格構文のような人称制限が存在しないので、能格構文に比べてより客観的と考えられるからである。客観的立場から物事を観察するため、一項構文はもちろん、二項構文も傍観者のように視野内にあるものを捉えることができる。対格構文における話し手の視点関係を、以下の図 5-4 に示す。

図 5-4 対格構文の視点図



上図により、対格構文は、二項構文から一項構文へと派生すると見られる。

その成立過程は、以下のように考えられる。まず、 x が y に働きかけて、二項構文が成立する。その時点、話し手は「 x が y に働きかける」という事実を一つの主体として客観的に認識する。後に、 x によって働きかけられた結果として y が残り、一項構文ができる。ここでも話し手は y を客観的に認識する。即ち、二項構文では、最初から「客観性の使役化」が成立している。そして、一項構文になっても客観のままであり、ただ客観の主体が異なるだけである。

対格構文における客観性は、格配置にも反映されている。まず、客観性であるため、視点が傍観者のように三人称に位置すると想定される。そして、一項構文の場合は能格構文と同様、「ガ格」を唯一の項に標識する。しかし、二項構文の場合は、最初から「外項」も「内項」も視野内に入るので、名詞句階層に従って、まず一番認知しやすい「外項」を「ガ格」で標識した後、残った「対象」に当たる「内項」を「ヲ格」でマークするのである。

(15) 花瓶が 割る。

例えば、(15)において、話し手は「花瓶が高いところから落ちて、粉々になる」という状況を目に映したと仮定できる。そして、それをそのまま言語化すると、この状況において現れた項は「花瓶」しかないので、「ガ格」はもちろんその唯一の項に置くほかならない。

(16) 彼が 花瓶を 割る。

次に (16) を見よう。この場合、話し手は「彼は花瓶を高いところから落として、粉々になる」という過程を目に映したと想定できよう。同じく、その状況をそのまま言語化するが、ここで視野に入るのは「彼」と「花瓶」との二項ある。話し手は、まずいちばん認知しやすいものを「ガ格」で標識する。名詞句階層に従い、「彼」は「花瓶」より上位に立つので、「ガ格=主格」は人間である「彼」に置かれる。そして、次に認知された「花瓶」は「対象」として扱われ、「ヲ格=対格」で示すことになる。

(17) 私が 花瓶を 割る。

(17) の場合も (16) と同じである。「外項」は一人称とはいえ、視点が話し手から外に引き出され、まるで三人称の立場から自分の行為を観察するため、格標識の決め方は (16) とまったく同じである。

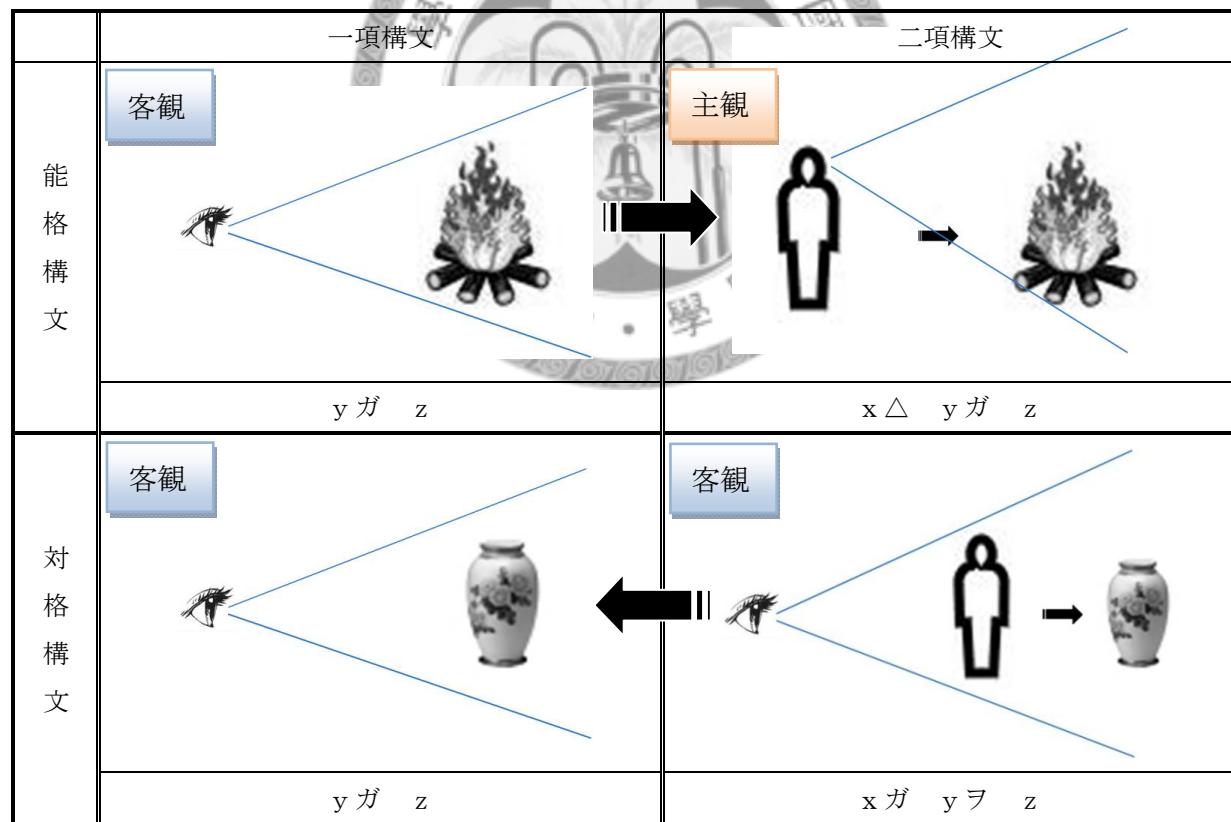
以上見てきたように、対格構文は、視点を話し手の外に置く客観性をもつ構文だと考えられる。特に二項構文では、話し手は客観性による傍観者的な立場に立つので、自分と他人の行為も描写することができる。また、自分が行う行為に対し、視点を自分から引き出し、まるで傍観者の立場に立っているように

発話することも可能である

5-1-4 能格構文と対格構文の違い

ここまで結論を振り返ってみよう。能格構文は、主観性をもつ構文であるのに対し、対格構文は、客観性をもつ構文である。さらに、能格構文において、他人の感情が観察できるという前提で、擬似一人称を取ることも可能である。それでは、両構文を使い分ける決定的な要素は何だろうか。もう一度、能格構文と対格構文の視点関係を比較しよう。図5-5を参照する。

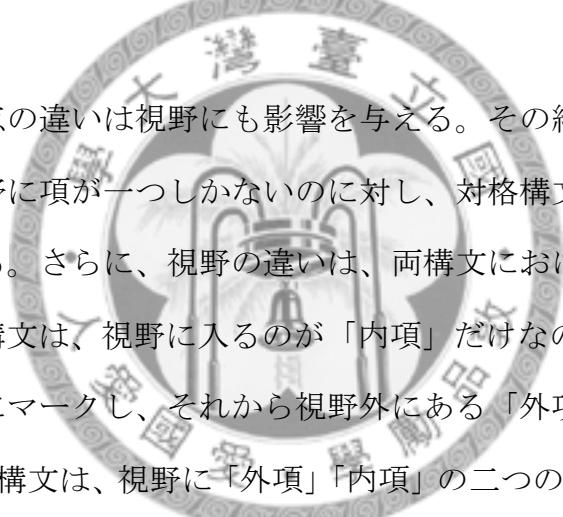
図5-5 能格構文と対格構文の視点比較図



図で比較すると、両構文の違いは一層明らかになる。一項構文の場合、両構文はどちらも客観的で、その違いはさほど観察されないが、二項構文の場合、

その違いがはっきりと出てきた。

まず、能格構文の使役化が主観的であるのに対し、対格構文のそれが客観的であることが観察される。前述のように、主観性による使役化は、その当事者の心を通さないと成立しないので、能格構文の視点は当事者にしか置けないとになる。その影響で、能格構文の「外項」は原則的に一人称を取っている。しかし、対格構文はそのような人称制限が存在しないため、能格構文より客観的だと考えられる。なお、対格構文は客観性が高いという理由で、発話する際に、視点は傍観者に置かれていると想定される。



以上のような視点の違いは視野にも影響を与える。その結果として、能格構文では話し手の視野に項が一つしかないのに対し、対格構文ではそれが二つあることが挙げられる。さらに、視野の違いは、両構文における格配置にも反映されている。能格構文は、視野に入るのが「内項」だけなので、「ガ格」標識はまずその唯一の項にマークし、それから視野外にある「外項」は「能格」で標識する。一方、対格構文は、視野に「外項」「内項」の二つの項が存在するため、名詞句階層規則に従って、「ガ格」は先に認知された方を標識し、残った方は対象として扱われて「ヲ格」で示した。この違いは両構文の格配置が異なるいちばん決定的な要因なのである。第2章で提示した、「主格」と「対象格」のようなく正反対の概念はなぜ同じ格標識で示されるかという疑問も、ここで解決できた。その原因是、両構文での視野が異なるため、「内項」は能格構文では「主格」、対格構文では「対象格」として、それぞれ捉え方が違ってくるからである。

以上を見て、「主観性」という要素は、能格構文と対格構文を使い分けるいちばん決定的なポイントだと思われる。なぜなら、「視点」「視野」「格配置」の違

いは、いずれも「主観性」に由来するからである。本章では、能格構文と対格構文を比較することによって、その違いと原因を具体的に述べてきた。次節は、日本語における能格構文の本質を見る。

5-2 日本語における能格構文の本質

前節は、能格構文と対格構文は主観性の違いによって区別されることを論じたが、実はそこから能格構文の本質にたどり着くことが可能である。前にも述べたように、能格構文と対格構文の最も目立った違いは、能格構文は「主観性による使役化」である一方、対格構文は「客観性による使役化」という点である。言い換えれば、もし物体には「人に主観的反応を引き起こす性質」がなければ、「主観性による使役化」というプロセスが生じない。能格構文も当然成立しない。これまで考察してきた能格性述語には、ほとんど人間の心で主観的反応を引き起こす意味内容をもっているものが多い。例えば、「こわい」「好きだ」「嬉しい」などは、いずれも人間の感情反応を喚起させる性質を含んでいる。

第3章の考察では、能格は「行為・過程の出発点」を明記するための格標識と判明したが、日本語の能格は、もっと正確に言えば、「主観的感情による行為・過程の出発点」と言った方が適切なのであろう。

日本語における能格構文の成立は、人が何かの物事に目を向けることから始まる。もしその物事に「人に反応を引き起こす性質」がない場合、使役化は発動せず、能格構文も当然発生しない。いわゆるただの客観描写になる。しかし、もしその物事に「人に反応を引き起こす性質」がある場合、心の中で何かの感情が生じるとともに「主観性」による使役化が働き、全体的には主観描写になる。したがって、「人に反応を引き起こす性質」による「主観性」が能格構文の

成立において最も重要な条件であると考えられる。

「主観性」の認定は、人々によって違うかもしれないが、日本人は共通のスキーマを共有していると想定されよう。例えば、前節で見た「一人称制限」は、英語などの言語に見られぬ、日本語の特徴とよく言われている。同じ出来事に対して、日本語は本人の身でそれを感じないと捉えられないが、英語などの言語は本人でなくても問題なく捉える。この点から見れば、英語より日本語の主観性が高いことは少し窺えよう。池上（2007）も、日本語は主観性の強い言語であると述べた。このような、他の言語と程度が違う「主観性」を、日本語の能格構文の本質と見なしてよからう。結論として、日本語においては、「強い主観性」が「一人称制限」をもたらし、連帶的に「能格構文」がその産物として誕生したと言える。

5-3 これまでの文法理論についての検討

これまでの文法理論は、「 $x ガ y ヲ z$ 」や「 $x ハ y ガ z$ 」といった「ガ格」をめぐる文法現象に対して、ほとんど対格言語の立場から論じている。その結果、「 $x ガ y ヲ z$ 」も「 $x ハ y ガ z$ 」も同じ構文として扱われ、前者の「ガ格」を「主格」、後者の「ガ格」を「対象格」と、それぞれ違う機能が付与されてしまい、日本語の「ガ格」にはどうしても二つの機能をもつことになる。

ところが、先行研究にも述べたように、日本語には対格言語だけではなく、能格言語の性質も存在するため、すべての構文を対格言語の立場から論じると、限界に達するおそれがある。例えば、本稿の考察では、対格言語は客観性をもつものであるが、能格言語はそれと違って、主観性をもつものである。そして、

従来同じ構文とされている「 x ガ y ヲ z 」と「 x ハ y ガ z 」は、実はそれぞれ客観性と主観性をもつ違う構文だということが明らかになった。

従来の研究は、すべての構文を同一の立場で論じていたため、処理できない死角がある。能格構文はその一例だと思われる。対格構文は、客観性をもつ構文なので、主観性に係わる構文を説明するには限界がある。上述のように、本来能格構文に属する「 x ハ y ガ z 」という構文は、対格構文と同じ構文とされた結果、日本語の「ガ格」にはどうしても二つの機能を付与しなければならない。しかし、本稿で提示された主観性をもつ能格構文の観点を取り入れることで、「 x ハ y ガ z 」という構文に関する格配置の問題も簡単に一人称視点で説明でき、日本語の「ガ格」も問題なく一つの機能で済ませる。

5-4 まとめ

本章は、能格構文と対格構文の違いについて比較した。その具体的な違いは、以下のようにまとめることができる。能格構文は、主観性をもつ構文である。その視点は原則的に当事者の一人称に置かれているため、視野には自分が見えない。その結果、視野内にある唯一の項を「ガ格」、視野外にある自分を「能格」で標識することになる。それに対し、対格構文は、客観性をもつ構文であるので、より客観的な傍観者の観点から物事を描写できる。そのため、視野には二つの項が入り、そこで、名詞句階層に従い、活動性が高い項を「ガ格」、活動性の低い項を「ヲ格」と、それぞれ格標識を付与する。即ち、日本語は主観性と客観性の違いによって、能格構文と対格構文が使い分けられるのである。

また、第2章の先行研究で出した、「主格」と「対象格」のような全く正反対

の概念はなぜ同じ格標識で示されるかという疑問も、本章の考察を通して解決できた。その根本的な原因是、両構文が構築された視野が異なるため、「内項」は能格構文では「主格」、対格構文では「対象格」として、それぞれ捉え方も違ってくるからである。



第6章 結論

6-1 本論文のまとめ

本稿は「ガ格」の扱い方をはじめとし、日本語の能格構文をめぐる文法現象を考察してきた。まず、日本語に存在する能格構文の性質を利用し、「ガ格」の機能を再び検討した。次に、能格構文の基本形を設定するとともに、「非対格性の仮説」と「語彙概念構造」を用いて、能格的文法現象における「統語レベル」と「意味レベル」を関連付けさせた。また、日本語における能格構文と対格構文を比較することで、能格構文の特徴とその本質を提示し、最後は、能格構文の性質を今の文法理論に導入して、従来と違う観点で日本語の構文を見直すことを示した。本稿の考察によって明らかになった結論を、以下に要約する。

まず、第3章では、日本語に存在する能格構文の性質を通して、「ガ格」の機能を再検討してみた。考察の結果、日本語における能格構文の基本形は「 $x \triangle y \text{ ガ } z$ 」として設定することができ、またその格配置は「△格=能格」「ガ格=主格」と、それぞれ位置付けられることができた。ただし、「能格」標識は日本語では主題化が常に働くために、「ハ」の後ろに隠れて、具現化されない。このように、能格構文の基本形を設定することによって、従来「対象格」とされた「ガ格」を「主格」として解釈することができ、日本語における「ガ格」をすべて「主格」という一つの機能に統合することができた。これで、先行研究で提出した「主格」と「対象格」が明快に区別できないという問題点を解決できるとともに、「主格」「対象格」のような全く正反対の概念がなぜ同じ格標識で示すのかという疑問も説明が付く。さらに、本章は先行研究で判明された「能格」の本質を借りて、日本語の「能格」は「行為・過程の出発点」を明

示する格標識であると規定した。結論として、能格構文の基本形とその発生過程については、以下のことが言える。能格構文の基本形は、まずある性質をもつ物体が存在し、それから人間が現れ、それを認知してから感情を発した、と定義付けられる。即ち、客観から主観へと変化するプロセスが、能格構文の発生過程である。

次に、第4章では、「非対格性の仮説」を能格性述語に導入し、「語彙概念構造」を通して分析することを試みた。その結果、「非対格性の仮説」で提示された「外項」「内項」の概念を、「 $x \triangle y \text{ ガ } z$ 」という能格構文の基本形において、それぞれ「 $x = \text{外項}$ 」「 $y = \text{内項}$ 」と規定することができる。そして、それをLCSとリンクさせて、能格構文における「統語レベル」と「意味レベル」を関連付けさせる。結論として、能格性述語は意味特徴によって、「外項」「内項」の現れ方が変わり、統語構造に反映されたことが分かった。その現れ方をもとに、本稿は能格性述語を以下のように分類できる。まず、「主観性の度合い」が増えるにつれて、「内項」しかない「非対格述語」は「外項」による「使役化」を通して「使役化的述語」へと派生する。要するに、客観性の強い述語（「高い」など）であれば「非対格述語」、主観性の強い述語（「好きだ」など）であれば「使役化的述語」となる。そして、「客観的用法」としても「主観的用法」としても用いられる、言わば、両者の中間に位置するもの（「こわい」など）は、「非対格述語」と「使役化的述語」の二種類の統語構造をもっている。さらに、上記における一部の「使役化的述語」（例えば、「嬉しい」など）は「内項」を「背景化」させることによって、「非能格述語」へと派生することができる。まとめとして、能格性述語はまず「主観性の度合い」に応じて、三グループ（各グループの代表的な語例は、それぞれ「高い」「こわい」「好きだ」である）に分けることができる。そして、もしそれらの述語に「内項背景化」が発生する場合、

「内項」はさらに言語表層から消去される現象が起きる（「嬉しい」など）。ちなみに、能格性述語が以上の分類要素に応じて反映された統語構造のパターンは、「非対格述語」「使役化的述語」「非能格述語」の三通りである。

最後に、第5章では、能格構文と対格構文の違いについて論じた。能格構文は主観性をもつ構文であるのに対し、対格構文は客観性をもつ構文である。つまり、「主観性の度合い」は両構文を使い分ける決定的な要素である。そして、「主観性の度合い」はまた「視点」「視野」「格配置」に影響を与え、両構文において様々な異なる統語現象を引き起こしている。例えば、主観性をもつ能格構文は、その当事者の心を通さないと使役化が成立しないので、話し手の視点は当事者と同じでなければならない。そのため、能格構文には「一人称制限構文」が存在する。それに対し、客観性をもつ対格構文はそのような制限がない。また、視点の違いは視野にも影響を及ぼす。その結果、能格構文は、視野に入るのが「内項」だけなので、まず「ガ格」標識はその唯一の項にマークし、それから視野外にある「外項」は「能格」で標識する。一方、対格構文は、視野には「外項」「内項」の二つの項が存在するため、名詞句階層規則に従って、「ガ格」は先に認知された方を標識し、残った方は対象として扱われて「ヲ格」で示すことになる。

6-2 今後の課題

今回では処理できなかったことを以下に整理する。まず、今回本稿が主に扱ったのは「形容詞」及び「状態動詞」の「単純形」であるため、「飲み+たい」「食べ+られる」などの「複合形」は考察対象に入れなかった。特に、「～たい」と「～れる／～られる」構文の意味特徴は、本稿で考察した能格性述語と大体

同じ性質をもつと考えられるので、本稿の能格構文という観点を「複合形」の述語にも応用できるのではないかと思われる。また、これまでの対格構文を中心とする日本語の文法理論に、本稿で論じた能格構文の考えを如何に導入するのかも大切な課題だと思われよう。以上の諸問題点に関する考察をすべて今後の課題として考えたい。



参考文献（日本語文献）

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』筑摩書房

李昌烈（1989）「日本語に見られる能格性」『文化』第53巻1・2号

大槻文彦（1897）『広日本文典』大槻文彦

奥津敬一郎（1978）『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお

奥津敬一郎他（1986）『いわゆる助動詞の研究』凡人社

大野晋（1977）「主格助詞ガの成立」『文学』第45巻6・7号

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎他（1997）『語形成と概念構造』研究社出版

影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお

影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお

岸本秀樹（2005）『統語構造と文法関係』くろしお

金水敏（1989）「『報告』についての覓書」『日本語のモダリティ』くろしお

久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店

小泉保（1982）「能格性－能格言語と対格言語」『言語』第11巻11号

小泉保（1993）『日本語教師のための言語学入門』大修館書店

小泉保（2007）『日本語の格と文型』大修館書店

近藤健二（2005）『言語類型の起源と系譜』松柏社

佐久間鼎（1983）『現代日本語法の研究』くろしお

柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店

柴谷方良（1982）『言語の構造 意味・統語篇』くろしお

柴谷方良（1982）「言語類型論の展開」『言語』第11巻11号

須賀一好他（1995）『動詞の自他』ひつじ書房

孫東周 (2005) 『日本語の動詞とヴォイス』 제이앤씨

高見健一 (2001) 『日英語の機能的構文分析』 鳳書房

高見健一他 (2002) 『日英語の自動詞構文』 研究社出版

高見健一他 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店

竹林一志 (2004) 『現代日本語における主部の本質と諸相』 くろしお

角田太作 (1983a) 「言語類型論」『言語生活』第 383 号

角田太作 (1983b) 「『能格』現象をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』第 48 卷 6 号

角田太作 (1984) 「能格と対格」『言語』第 13 卷 3 号

角田太作 (1985) 「言語プロトタイプ論」『言語』第 14 卷 6 号

角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお

寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 II - 言語学・日本語教育編 -』 くろしお

時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』 岩波書店

外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成』 ひつじ書房

中井悟他 (2004) 『生成文法を学ぶ人のために』 世界思想社

中島文雄 (1987) 『日本語の構造』 岩波書店

二枝美津子 (2007a) 『格と態の認知言語学』 世界思想社

二枝美津子 (2007b) 『主語と動詞の諸相』 ひつじ書房

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』 明治書院

仁田義雄 (2007) 「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学』第 84 卷 6 号

丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』 和泉書院

野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』 くろしお

橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店

益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」『視点と言語行動』くろしお

松本克己 (1990) 「言語類型論と歴史言語学」『国文学解釈と鑑賞』第 55 卷 1 号

松本克己他訳 (1992) 『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房

松本克己 (2006) 『世界言語への視座』三省堂

松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語』三省堂

松本泰丈 (1990) 「能格現象と日本語」『国文学解釈と鑑賞』第 55 卷 1 号

丸田忠雄他編 (2000) 『日英語の自他の交替』ひつじ書房

三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお

三上章 (1963) 『日本語の論理』くろしお

三上章 (1972) 『現代語法序説』くろしお

三上章 (1972) 『続・現代語法序説』くろしお

三原健一 (1990) 「多重主格構文をめぐって」『日本語学』第 9 卷 8 号

三原健一 (1998) 『生成文法と比較統語論』くろしお

三原健一他 (2006) 『新日本語の統語構造』松柏社

矢澤真人他編 (2006) 『現代日本語文法 現象と理論のインターラクション』ひつじ書房

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお

山口明穂 (2000) 『日本語を考える』東京大学出版会

山口明穂 (2004) 『日本語の論理』大修館書店

山崎馨 (1992) 『形容詞助動詞の研究』和泉書院

山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館出版

山田昌裕 (2010) 『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房

頬錦雀 (2005) 『日本語次元形容詞研究』致良出版社

頬錦雀 (2007) 『日本語心象形容詞研究』致良出版社

渡辺明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』大修館書店

渡辺実 (2002) 『国語意味論』塙書房

参考文献（英語文献）

Bennis, Hans (2004) "Unergative Adjectives and Psycho Verbs". In A. Alexiadou, E.

Anagnostopoulou and M. Everaert (eds.) *The Unaccusativity Puzzle:*

Explorations of the Syntax-Lexicon Interface. Oxford: Oxford University Press.

Cinque, Guglielmo (1996) "Ergative Adjectives and the Lexicalist Hypothesis". In

Guglielmo Cinque *Italian Syntax and Universal Grammar*. Cambridge:

Cambridge University Press.

DeLancey, Scott. (1981) "An interpretation of split ergativity and related patterns".

Language Vol.57.

Dixon, Robert. M. W. (1979) "Ergativity". *Language* Vol.55.

Perlmutter, David (1978) "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis".

BLS Vol.4

Silverstein, M. (1976) "Hierarchy of features and ergativity". In Dixon (ed.)

Grammatical Categories in Australian Language. Canberra: Australian

Institute of Aboriginal Studies.

Trask, R. L. (1979) "On the origin of ergativity". In Plank (ed.) *Ergativity: Towards a*

Theory of Grammatical Relations. London: Academic Press.

Tsujimura, Natsuko (1993) "Unaccusative Nouns and Resultatives in Japanese". In

H. Hoji (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*. Stanford: SLA, Stanford University.

付録 能格性述語 LCS 一覧 (五十音順)

単語	述語類型	上位事象	使役化	変化	下位事象
ある	非対格			[BECOME	[y BE AT-z]]
ある	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME	[y BE AT-z]]
いい	非対格				[y BE AT-z]]
いい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
いる	非対格			[BECOME	[y BE AT-z]]
いる	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME	[y BE AT-z]]
要る	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME	[y BE AT-z]]
嬉しい	非対格				[y BE AT-z]]
嬉しい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
嬉しい	非能格	[x ACT]			
おかしい	非対格				[y BE AT-z]]
おかしい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
おかしい	非能格	[x ACT]			
悲しい	非対格				[y BE AT-z]]
悲しい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
悲しい	非能格	[x ACT]			
聞こえる	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME	[y BE AT-z]]
嫌い	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
怖い	非対格				[y BE AT-z]]
怖い	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
怖い	非能格	[x ACT]			
寂しい	非対格				[y BE AT-z]]
寂しい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
寂しい	非能格	[x ACT]			
上手	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]
好き	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]]

単語	述語類型	上位事象	使役化	変化	下位事象
楽しい	非対格				[y BE AT-z]
楽しい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
楽しい	非能格	[x ACT]			
できる	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME]	[y BE AT-z]
得意	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
懐かしい	非対格				[y BE AT-z]
懐かしい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
懐かしい	非能格	[x ACT]			
苦手	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
必要	非対格				[y BE AT-z]
必要	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
下手	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
欲しい	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE		[y BE AT-z]
見える	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME]	[y BE AT-z]
分かる	使役化的	[x ACT ON y]	CAUSE	[BECOME]	[y BE AT-z]

(筆者作成)

